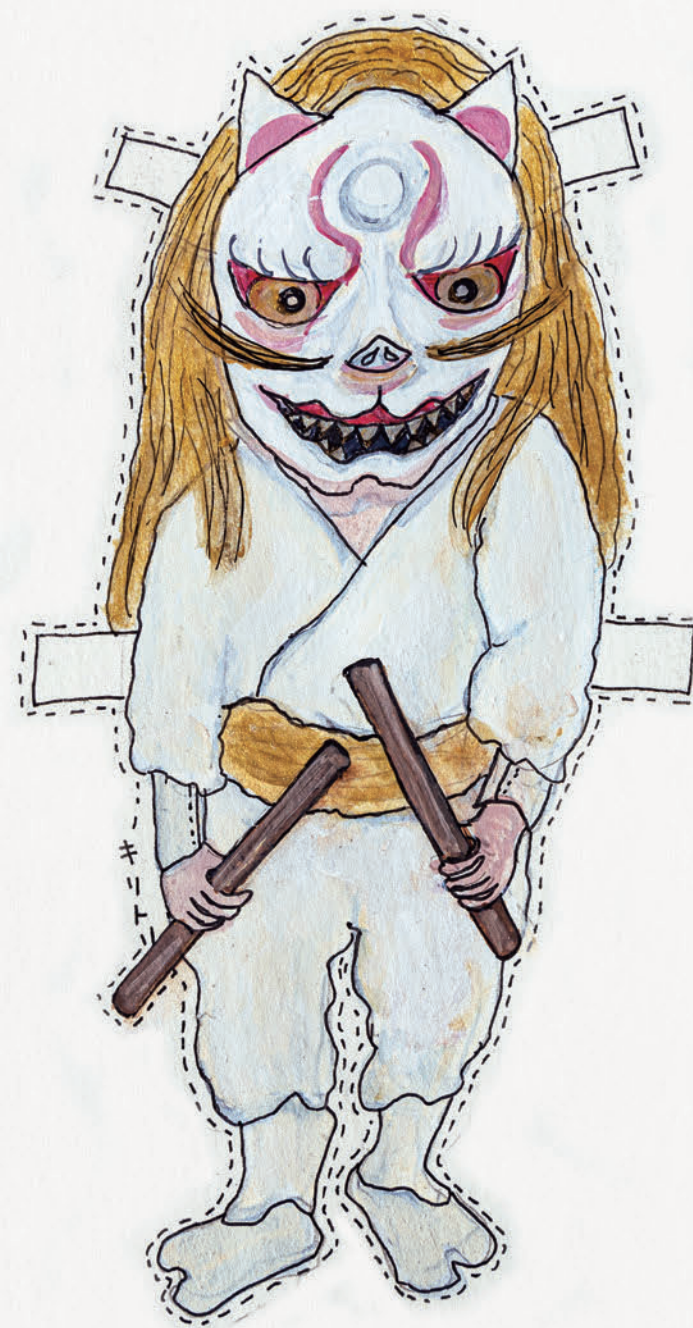
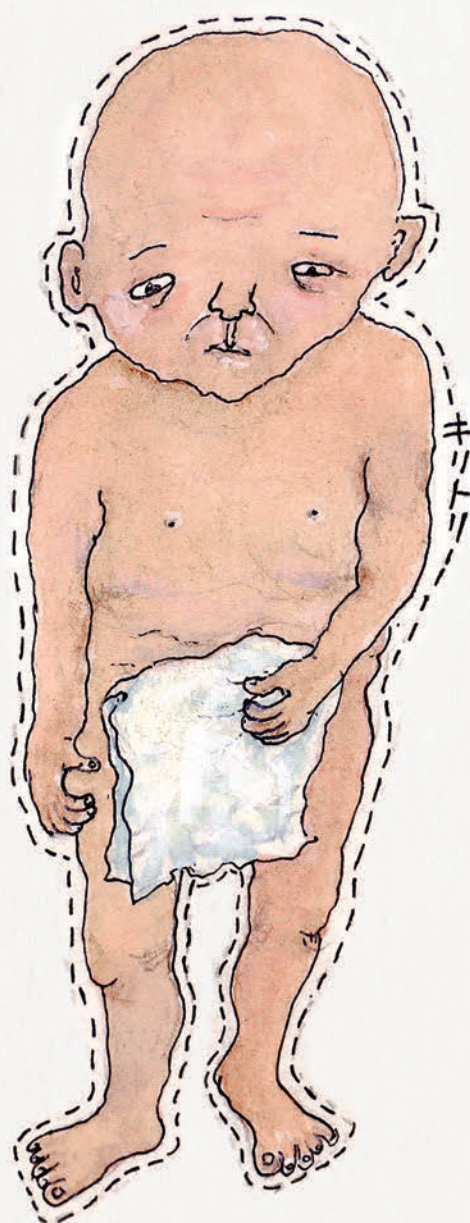


NASU INTERPRETATION's ACTION

那須インタープリテーション's アクション

Version 02



なす爺の着せかえ	アーカイブ	何故、ストーリー集なのか	那須インタープリテーションの目的	那須インタープリテーションとは	愛された那須のストーリー	④ 御用邸の物語	居心地の良さのストーリー
82	81	80	79	78	74	73	68

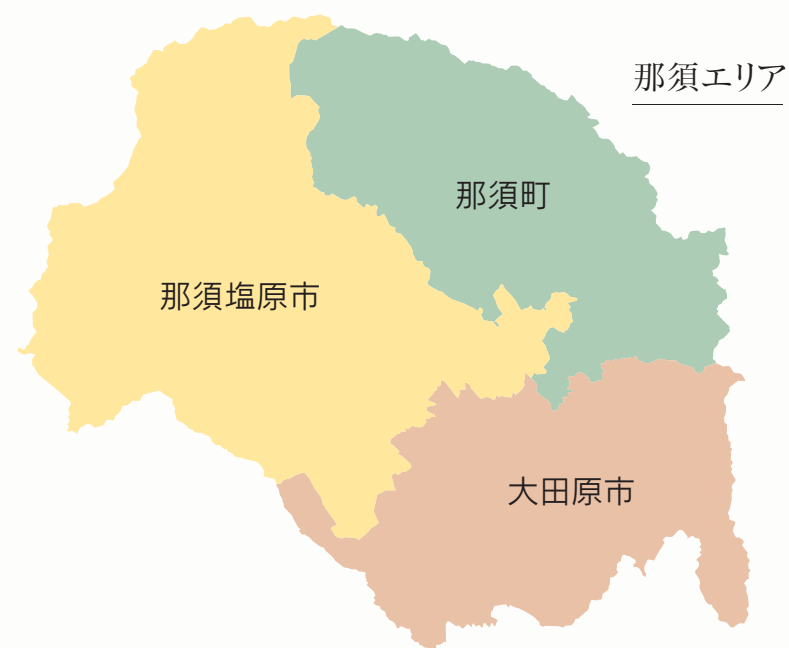


メインテーマ

那須エリアは、自然の圧倒的なポテンシャルはあるが、故に、過酷な環境でもあった。そうした荒地を、先人たちは苦勞しながらも、入植者と地域の人達が互いに助け合い、開拓し、厳しい自然を、豊かな恵みに変えて来た。

今の那須エリアを支える自然の豊かさと人を受け入れる土壌は、元から与えられたものではなく、自然と人が葛藤しながらも光を見出し、助け合いと調和の精神を受け継ぎながら、弛まぬ努力を続けて来た結果である。

那須エリアを訪れる方には、そうした豊かな恵みを体感いただきながら、人と自然の厳しくも希望溢れる大地の痕跡を通し、ほつと一息つきながらも、これからを生きていく活力にしてほしい。



那須エリア

那須市

那須塩原市

大田原市

地域の人からは、“なす爺”と呼ばれている。那須生まれ・那須育ち。年齢不詳。この地の成り立ちや風習まで、何でも知っている地域の生き字引。シャイだが話し好きで、那須のストーリーを語らせたら右に出るものはいない、らしい。



なす爺

ストーリーを伝えるための、 重要な資源とテーマ

那須を大好きになるストーリー集における資源とは、その場所が持つ特別な価値や魅力を伝えるための重要な要素のことです。それは目に見える自然や建造物だけでなく、その場所の歴史や文化、人々の営み、そこで起きた出来事など、目に見えないものも含まれます。これらの資源は、単独で存在するのではなく、互いに深く関連し合い、その地域ならではの特徴を生み出しています。

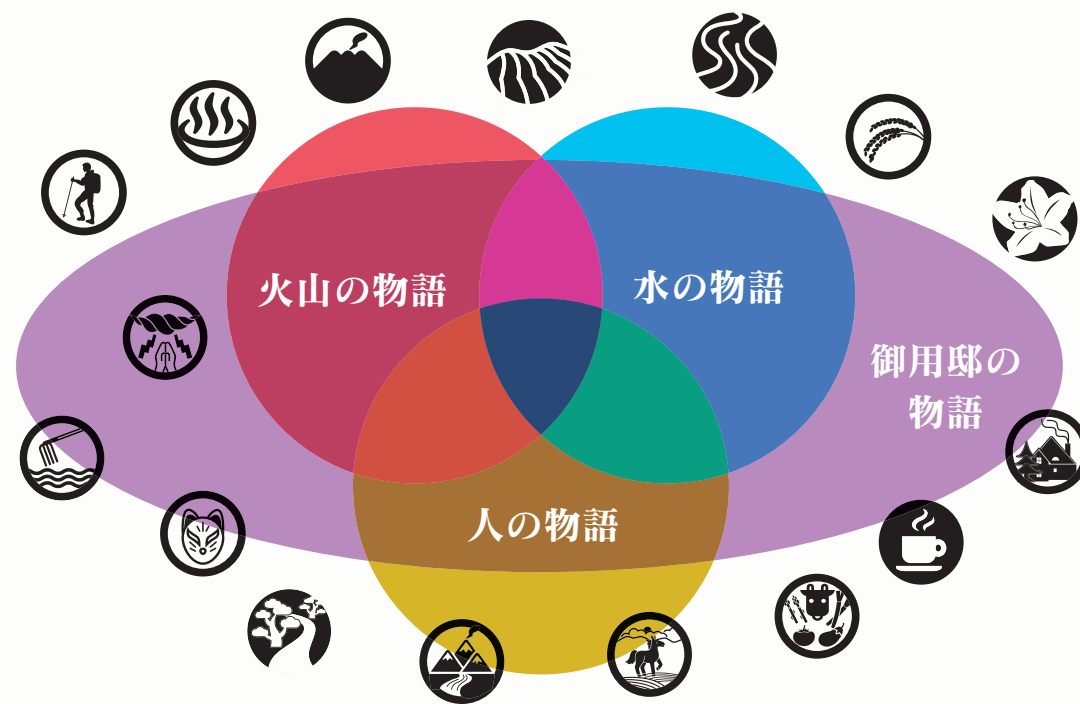
テーマ(各項目のタイトル)は、これらの資源が語る物語の中心となる考えや概念のことです。それは単なる事実の羅列ではなく、その場所の本質的な価値や意味を表現するものです。テーマは来訪者に深い理解と感動を与え、その場所との個人的なつながりを見い出すきっかけとなります。

那須エリアを4つの項目に分けた理由は、この地域の本質的な特徴を、分かりやすく、かつ深い意味を持つ形で伝えるためです。

「火山の物語」と「水の物語」は、那須の自然環

生み出した地形により恵みを受けながらも人々は努力をし、その努力によつて得られた水が人々の暮らしを支え、そして地域の魅力が皇室にも認められた。それこそが地域の誇りとなつている。このように、4つの物語は互いに響き合ひながら、那須という場所の豊かな個性を形作つていくのです。

このように物語を整理することで、来訪者は、
那須の持つ多面的な魅力を理解しやすくなり、
また地域の人々も自分たちの地域の価値を改め
て認識することができます。



境の核心部分を表しています。これらを2つに分けたのは、火山活動によつて形作られた地形と、そこから生まれる温泉や湧水が、それぞれ異なる、しかし密接に関連した物語を持っているからです。火山は那須の大地の形成と変化を物語り、水は生命と暮らしの源としての役割を持っています。

「人の物語」は、この自然環境の中で人々^{びと}がどのように暮らし、文化を築き、地域を発展させてきたかを語っています。これは火山と水の物語と切り離せない関係にあり、自然と人間の共生の歴史を示しています。

「御用邸の物語」を独立した項目としたのは皇室との関わりが那須の歴史と発展に特別な影響を与え、地域のアイデンティティの重要な部分となっているからです。これは単なる御用邸の歴史ではなく、那須という地域の価値が高く評価され、大切にされてきた証でもあります。

これで、実は深く結びついています。火山活動が

このストーリー集が生み出す新たなつながりは、那須の魅力をさらに広く深く伝え、訪れる人々がこの地を愛するきっかけとなるはずです。私たちは、その未来を信じ、地域全体が一つとなって新たな物語を紡ぎ続けていきたいと願っています

観光業

訪れる人々が那須の自然や文化を深く感じられる旅にするためのヒントに。雄大な山々や里山の風景を楽しみながら、その背後にある歴史や物語がさりげなく伝わり、心に残る体験となるように…。

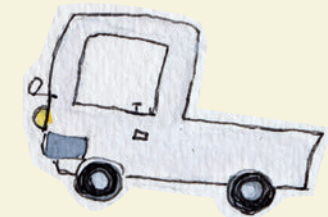
宿泊業

滞在を通じて那須の魅力を感じてもらおうおもてなしとして。地域に根ざした温かなサービスで、訪れた人々が那須の人々の暮らしや文化に触れ、心地よい時間を過ごせるようになるためのアイデアとして…。

飲食業

那須の恵みを味わい、その背景に想いを馳せる食事。地元の食材を使った料理を楽しみながら、その食材が育まれた風土や季節の移ろいを感じられるようにするために…。

「那須を大好きになるストーリー集」を活用してこんな風につかってほしい



農業・地場産業

生産品の特徴を表すための物語の構築に。また那須の自然とともにある暮らしを共有し愛着を持ってもらうために。地域の産品や手仕事を通じて、那須で培われた知恵や技が伝わり、訪れた人々がその価値を感じ取るきっかけに…。

サービス業

日常の中で那須の魅力をさりげなく。接客やコミュニケーションの中で、那須の美しさや文化が自然と伝わり、訪れる人々の心に響くように…。

教育関係

那須の自然や文化を学び、未来へとつなげる機会を創出するために。次の世代が地域への愛着と誇りを持てるように。体験活動や交流を通じて豊かな感性を育み、那須との深いつながりを感じられるように…。

このように、各業種がそれぞれの場面で「那須を大好きになるストーリー集」を活用し、那須の資源をつなげて伝えることで、訪れる人々に那須への深い愛着を育んでもらいたいと考えています。そして、地域の魅力が最大限に引き出され、那須を訪れる人々が増え、何度でも足を運びたいくなる場所へと成長していくことを願っています。

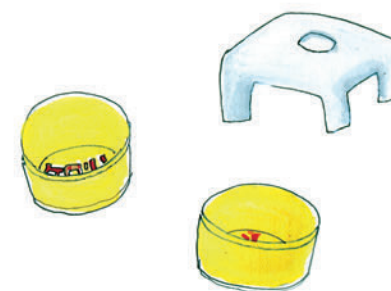


① 火山の物語

自然の圧倒的なポテンシャル



なす爺は温泉好き。
那須に6つある異なる泉質の温泉
に日替わりで入浴するのが常。
浴衣も手拭いもいつも肌身離さず
持ち歩く。那須の温泉を語らせたら
右に出るものはいないらしい。



那須を大好きになるストーリー集



1 火山の物語

那須の火山が1400年休むことなく生み出す
6つの泉質は、色と香りと温もりで訪れる人々を
癒す地球からの優しい贈り物である。

1400年の 湯のストーリー

肌を包むやわらかな湯気の向こうに、この地の深い呼吸が聞こえてくるようです。いまあなたの身体を温めているこの熱が、はるか昔、1400年も前から絶えることなく湧き続けている地球からの贈り物だと知ったら、どんな気持ちがするでしょうか。

那須の地下深くでは、巨大な熱の源が決して眠ることなく、今この瞬間も活動が続いています。それは時として荒々しい顔を見せる火山。しかし、ここでは人々の心と身体をそっとほぐす、慈愛に満ちた表情を見せてくれます。太古の地層をくぐり抜けて地上に現れるとき、その恵みは一つではなく、6つの異なる泉質という、まるで個性豊かな処方箋となつて私たちの前に届けられるのです。それぞれに異なる色、香り、そして肌ざわりで、訪れる者にそっと寄り添います。

その昔、傷ついた二頭の白い鹿が、谷の奥深くで傷を癒していたという伝説が残る湯。それが、この地と人との長い物語のはじまりでした。以来、天下を治めた武将も、風に吹かれて旅をした俳人も、そして名もなき多くの人々も、時代を超えてこの火山の温もりに身を委ねてきました。それぞれが抱える疲れや痛みを、この湯は静かに受け止めてきたのです。それは、人の営みがどれだけ変わろうとも、変わることなく恵みを与え続ける火山の、大きな優しさなのかもしれません。

あなたがいま浸かっているこの温泉は、1400年という時間を超えて、無数の人々の想いが溶け込んできた場所でもあります。6つの泉質が持つそれぞれの色と香りと温もりは、あなたの心と身体に、どんなふうに語りかけてくるでしょうか。目を閉じて、那須岳の奥深くから届く温もりを感じてみてください。それは、あなたという存在が、この那須岳の壮大な営みと、そして人々の長い癒やしの物語の一部になった、確かな証なのですから。

テーマの目的

火山が1400年という長い時間、休むことなく活動を続けていることを理解する。その継続的な活動が6つの異なる泉質を創り出していることを認識する。色、香り、温もりという五感で火山の恵みを感じられることを知る。温泉が火山活動による地球からの贈り物という壮大な視点を持つ。



物語の奥にあるもの

ストーリーの解説

この物語で描きたかったのは、単なる温泉の紹介ではありません。来訪者が体験する温泉に浸かるという行為の背後にある、壮大な時間の流れと地球の営みです。那須の温泉の温かさが、一過性の心地よさではなく、1400年間も活動を続ける火山のエネルギーと、同じ湯で癒されてきた無数の人々の歴史とが重なり合った、深い価値を持つものであると感じていただくことを目指しました。来訪者自身が、その大きな物語の連なりの中にいる主役であると感じられればと思います。

資源の解説

物語の中に登場する傷ついた鹿を癒した湯とは、1400年前の630年頃に開湯したと伝わる「鹿の湯」を指しています。那須岳（茶臼岳）は今も活動する火山であり、「鹿の湯」は、その中でも火山ガスの影響を強く受けた特徴的な単純酸性硫酸温泉（硫化水素型）で、白く濁った湯は、火山という荒々しい自然が命を育む癒やしの力をも持つことを象徴する、那須の温泉文化の原点です。そして、この地の恵みは一つではありません。地下を旅する水の経路や深さ、触れる地層の違いによって、那須温泉郷には6つの泉質とも言われる多様な湯が生まれています。日本に存在する主な温泉の泉質は10種類に分類されますが、この那須の地には、そのうち6つの泉質（単純温泉・単純硫酸温泉・硫酸黄泉・酸性泉・硫酸塩泉・含鉄泉）が集まっています。これは全国的に見ても非常に多様性に富んだ、稀有な温泉地でもある言えます。酸性の硫酸黄泉から、肌に優しい単純温泉、アルカリ性の湯まで、訪れる人の数だけ処方箋があるかのように揃っているのです。また、物語にある武将源頼朝や俳人松尾芭蕉が訪れたという史実は、この地の温泉が時代を超えて人々を惹きつけてきた普遍的な魅力の証でもあります。

感じ取ってほしいメッセージ

地下で休むことなく活動を続ける火山の生命力。1400年という時間の長さ、その間絶え間なく続いてきた火山の営み。6つの泉質それぞれが持つ色の違い、香りの違い、温もりの違い。温泉が人工的なものではなく、地球が創り出す自然の恵みであること。火山からの贈り物を受け取る喜びと感謝。

探求を促す「問い」の解説

「6つの泉質が持つそれぞれの色と香りと温もりは、あなたの心と身体に、どんなふうに語りかけてくるでしょうか」という問いは、来訪者に内面との対話を促すためのものです。泉質の違いを知識として知るだけでなく、自身の感覚を研ぎ澄まし、自分にとつての癒やしとは何かを考えるきっかけを提供します。温泉というきわめて個人的な体験を通じて、火山（自然）と自己との間に特別な関係性を築いてもらうこと。それが、この問いに込めた想いです。

自身が物語となる問い

温泉に浸かるとき、あなたはこの湯は何を語りかけているでしょうか。もし1400年前の人が隣にいたとしたら、どんな言葉を交わすでしょう。この火山の恵みは1000年後の未来にどのようなことを残すでしょうか。湯けむりの中で静かに自問するとき、あなたの那須での体験は、あなただけの忘れられない物語へと変わっていくはずです。



① 火山の物語

テーマを感じられる 資源・体験

6つの異なる泉質の温泉を実際に巡り、色の違い（乳白色、透明など）を目で見る。硫黄の香りや各泉質特有の香りを嗅ぎ、火山の息吹を感じる。温泉に浸かりながら、この温もりが地下の火山から今まさに届いていることを意識する。1400年前の人々も同じ火山の恵みを受けていたことを想像し、時間を超えたつながりを感じる。温泉に浸かりながら、地球が自分に贈り物をしてくれていることへの感謝の気持ちを抱く。



写真提供/那須昔語館

大正3年～10年の湯本

一 鹿の湯

1400年の歴史を誇る、那須温泉の原点。異なる温度の湯船で、古来の湯治文化を体験できます。



一 殺生石

火山ガスの噴出を間近に感じられる場所。地球の息吹と、火山の物語の源泉を肌で感じることができます。



一 那須温泉神社

鹿の湯の発見とともに建立された神社。鹿の湯の発見者である狩野三郎行広も祀られています。



那須湯本 温泉街の散策

湯本の町並みを歩き、温泉と共に生きてきた人々の歴史に思いを馳せることができます。



板室温泉 (那須塩原市)

「白湯山信仰」の歴史が残る温泉地。那須連山の恵みが異なる形で届いていることを感じられます。



一 北温泉

映画のロケ地にもなった、江戸時代からの湯治場の雰囲気の色濃く残す温泉。



一 大田原温泉

アルカリ性の泉質が特徴。火山の恵みが広大な那須野が原の地下水脈にまで及んでいることを体験できます。





① 火山の物語

那須岳から麓へと続く起伏は、火山が1億年かけて描いた大地の物語であり、今も噴気とともに新たなページを綴っている。

大地の記憶にふれる ストーリー

あなたの足元に広がるこの大地が、はるか一億年以上も昔、深い海の底だったことを想像したことはありませんか。いま目の前にそびえる山の頂きが、まだ影も形もなかった頃の、静かな海の記憶。那須の物語は、遙かなる時間の中から始まります。

やがて大地は隆起し、巨大な火山が何度も火を噴きました。熱い溶岩が流れ、分厚い火山灰が降り積もる。そのたびに風景は描き変えられ、気の遠くなるような時間をかけて、なだらかな裾野や深い谷といった、今の私たちが目にする美しい起伏が刻まれていきました。それは、火山という名の芸術家が、途方もない年月をかけて描いてきた、壮大な大地の絵画なのかもしれません。

そして、その絵画が、今もなお描き続けられている証拠が、あの茶臼岳から上がる噴気です。こうこうと音を立て、硫黄の香りを漂わせるあの息吹は、この物語が過去のもではなく、現在進行形で続いていることを力強く示しています。火山は今この瞬間も、大地の物語に新たなページを書き加えているのです。

あなたが今立っているこの場所は、ただの地面ではありません。一億年以上の時間をかけて、地球が綴ってきた壮大な物語の、まぎれもない1ページなのです。麓へと広がる起伏を眺め、山の息吹を感じるとき、あなたはこの物語に、どんな続きを想像するでしょうか。

テーマの目的

茶臼岳を起点として麓へと広がる地形が、火山活動によって長い時間をかけて形成されてきた「物語」であることを理解する。その物語が完結したものではなく、今も噴気を伴いながら続いている進行形の物語であることを実感する。

物語の奥にあるもの

ストーリーの解説

この物語で描きたかったのは、那須の地形の成り立ちを解説することだけではありません。来訪者が自身の足元にある大地の成り立ちに想いを馳せ、目の前の風景が一億年以上も続く地球の営みそのものであり、今もなお続いている進行形の物語であることを感じていただくことです。その壮大な時間の旅の最後に、今ここに立つあなた自身がいる。そのことに気づくとき、風景はただの景色ではなく、あなたと深くつながった物語の舞台へと変わっていく。私たちはそう信じています。

資源の解説

物語に登場する噴気は、このテーマの核心です。それは、茶臼岳が約1万6千年前から活動を始めた、那須火山群で最も新しい火山であり、今も活動している証拠です。茶臼岳は、気象庁が「常時観測対象」に指定する、まさしく生きている火山です。その山頂部を形作るこつこつとした溶岩ドームは、室町時代（1410年）の噴火で生まれました。1億年の物語の最新ページを象徴するものとして捉えています。そして麓へと続く起伏そのものが、火山が時間をかけて描いてきた物語の本文です。このなだらかな裾野は、古い火山の山体崩壊によって流れた土砂や、約30万年前の塩原カルデラの大噴火による火砕流、そして新しい茶臼岳の噴出物などが、何度も積み重なってできた、日本最大級の複合扇状地（那須野が原）です。火山灰や砂礫が厚く積もった大地は、川の水が地下に潜る水無川（蛇尾川）を生み出し、かつては水を得ることが難しい荒野でした。これらの資源は、来訪者が物語の世界と現実の風景とを結びつけるための、大切な道しるべとなります。

感じ取ってほしいメッセージ

那須の起伏を物語として捉える視点。1億年という時間の中で、火山が二つの地形を「描いて」きたという創造性。その物語が過去のもではなく、今も新たなページを綴っているという現在進行形の感覚。噴気が物語の続きを示す証拠であることへの気づき。

探求を促す「問い」の解説

「あなたはこの物語に、どんな続きを想像するでしょうか」という問いは、知識として地形を理解するのではなく、あなた自身の五感で、大地との対話を始めていただくためのものです。山の息吹を感じながら、この大地の未来に想いを馳せる。頭で考えるのではなく、心と身体で感じることで、火山（自然）とあなたとの間に、個人的で、誰にも真似できない特別な関係が生まれます。その感覚こそが、那須での体験を忘れられないものに変える鍵となると考えています。

自身が物語となる問い

もし、この大地が言葉を話すなら、どんな物語を聞かせてくれるでしょう。一億年の記憶を持つこの大地に、あなたはどんな未来の物語を重ねたいですか。噴煙を上げる山の頂きを眺めながら静かにこれらの問いを思い浮かべてください。あなたの那須での一日は、あなただけの壮大な物語のプロローグへと変わっていくはずです。



① 火山の物語

テーマを感じられる 資源・体験

茶臼岳から那須高原を見渡し、広がる起伏が火山の物語であることを想像する。ロープウェイや登山道を通じて、標高の変化とともに変わる地形を体感する。噴気孔や硫黄の匂いを体験し、物語が今も続いていることを実感する。那須エリアの様々な場所を訪れ、それぞれが物語の一章であることを理解する。

那須ロープウェイ・ 茶臼岳登山

噴煙を上げる火口を間近に見ながら、今も続く地球の息吹（物語の最新ページ）を肌で感じることができます。山頂から麓を見下ろし、火山が描いた起伏の壮大さを実感できます。

一殺生石

麓にいながらにして、硫黄の匂いと噴気が立ち込める荒涼とした風景の中に、火山の活動が今も続いていることを実感できます。



那須高原 展望台 (恋人の聖地)

那須岳から麓へと広がる、火山が創り出した雄大な裾野（起伏）を一望できます。



芦野・伊王野の 古い町並み散策

那須連山より古い火山活動で生まれた「芦野石」を使った蔵や堀が残る町並み。1億年よりさらに昔の、物語の序章に触れることができます。



一石の美術館

「芦野石」の採掘場跡に建てられた美術館。石の持つ力強さと温もりを、建築を通して体感できます。



① 火山の物語

那須岳は、地球の鼓動を荒々しい岩肌と噴気で地表に噴き上げ、地球のダイナミズムを一步ごとに足裏から伝えてくれる山である。

山の咆哮のストーリー

耳をつんざくような轟音。大地が、まるで巨大な獣のように咆哮をあげています。足元の岩盤からは、地球の奥深くから湧き上がる熱が、靴底を通してじかに伝わってくるようです。ここは、ただ静かに佇む山ではありません。いま、この瞬間もマグマをたぎらせ、凄まじいエネルギーを噴き上げ続ける、惑星の脈動そのものなのです。ごつごつとした荒々しい岩肌に手を触れてみてください。これは、幾度となく大地を焼き尽くし、すべてを飲み込んできた溶岩が冷え固まった、破壊と創造の記憶。かつて硫黄を求めた人々が掘り進んだ鉱山の跡は、この圧倒的な自然の力と向き合い、その一部を恵みとして受け取るうとした人の営みの痕跡です。

山が絶え間なく吐き出す噴気は、空を覆い、硫黄のにおいをあたり一面に漂わせます。それは、この大地が決して人間の思い通りにはならない、荒々しい魂を持っていることの証。私たちは、その巨大な生命体の前では、あまりにも小さな存在であることを、ただ思い知らされるばかりです。

しかし、その圧倒的な力の前に立ち尽くすとき、心の奥底から不思議な感覚が湧き上がってくるのを感じるはず。それは恐怖だけではない、生命の根源に触れたかのような、荘厳な感動。地球の鼓動が、あなたの身体の芯を震わせ、忘れかけていた野生の感覚を呼び覚ますのです。

テーマの目的

那須岳は地球が生きていることを実感できる山であることを知る。自分たちが立っている大地が火山が現在進行形で活動していることを地球のダイナミズムとして実感してもらう。

物語の奥にあるもの

ストーリーの解説

この物語は、来訪者を穏やかな自然鑑賞の客席から誘い出し、地球という劇場の、荒々しい舞台そのものに立たせることを目指しました。ここでは、那須岳は圧倒的な力を持つ、畏怖すべき存在として描かれています。その力の前に立つことで、人は自らの小ささを知り、同時に、そのような巨大な営みの一部であることへの感動を覚える。この物語は、来訪者が自身の内なる野生と出会い、地球の鼓動と共鳴する、そんな瞬間を生み出すための序曲です。

資源の解説

ゴオーという轟音を立てる噴気孔の風景は、このテーマの核心である火山の圧倒的なパワーを最も雄弁に物語る資源です。これらは、ただ見るだけの対象ではありません。その音を聴き、その熱を感じ、その香りを嗅ぐことで、来訪者は五感のすべてを使って火山の力と対峙することになり、来訪者を物語の主役へと変える、強力な触媒となります。そして、ストーリーにも登場する鉱山の跡もまた、このテーマを深く体感する資源です。那須岳の硫黄鉱山の歴史は古く、江戸時代には火薬の原料となる硫黄やミョウバンが採掘され、黒羽藩から幕府へ献上されていました。人々は山の咆哮の中で、その恵みを命懸けで採掘してきたのです。掘り出された硫黄は土樋(どごり)と呼ばれるソリに約600kgも積まれ、多くは夫婦が息を合わせて麓へと滑り下ろし、空になった重い樋は牛が山へと引き上げました。荒々しい火山の力と向き合い、知恵を絞り、動物とも共生しながら生きてきた人々の逞しい営みの跡は、この大地が持つもう一つのパワーを私たちに教えてくれます。

感じ取ってほしいメッセージ

地球の生命力。地下で脈打つエネルギーの存在。火山の圧倒的な力。自分が生きた大地の上に立っているという実感。地球の鼓動と自分の鼓動のつながり。火山の持つ原始的なパワー。自然の壮大さへの畏敬。

探求を促す「問い」の解説

物語の最後に、あえて問いを投げかけていません。それはこのテーマが求める体験が、内省や対話よりも、言葉を手放すほどの圧倒的な感覚そのものにあるからです。問いかけるまでもなく、大地がその轟音と熱と匂いで、来訪者の全身に直接語りかけてくる。思考を介せず、ただその場に立ち尽くし、圧倒的な地球の鼓動を感じてもらうこと。それがこのテーマに込めた想いです。

自身が物語となる問い

この咆哮をあげる大地に立ち、あなたは何を叫びたいだろうか。古代の人たちは、この光景をどんな神の姿として語っただろう。この尽きることのないエネルギーは、100年後の未来に脅威と恵みのどちらをより多くもたらしているだろうか。轟音の中で響く自らの問いは、那須での時間を、単なる思い出ではなく、あなたの心に深く刻まれる物語になるでしょう。



① 火山の物語

テーマを感じられる 資源・体験

茶臼岳の硫黄の匂いを体感する。噴気の音を聞き火山の生きた鼓動を感じる。荒々しい岩肌に触れて火山の力を感じる。足元の大地が生きていることを意識する。

茶臼岳 トレッキング

噴気孔を間近に望み、硫黄の香りと大地の熱、噴気の轟音を全身で感じられる場所。火山の呼吸を最も強く体感できます。



硫黄鉱山の作業風景 写真提供/那須曾話館

朝日岳 トレッキング

鋭い岩稜が続く朝日岳への登山道は、火山が作り出したダイナミックで険しい地形を体感させます。山頂からは今も活動を続ける茶臼岳を異なる角度から望むことができ、那須連山全体の雄大なパワーを感じられます。



三斗小屋温泉 の噴泉

登山道を歩いた先で出会う、地面から温泉が噴き出す間欠泉。地球の内部の圧力を直接目にすることができ、火山の奥深いエネルギーを感じさせます。



駒止の滝

火山が作り出した険しい地形美と、そこを流れる水の恵みを同時に感じられる場所。



荒々しい茶臼岳の姿を眺めながら、火山が育んだ美しい自然景観(湿原や紅葉との対比)を感じることができます。

峰の茶屋、牛ヶ首、姥ヶ平を 巡るトレッキング



殺生石

山の活動が麓の暮らしにまで及んでいることを示す象徴的な場所。荒々しい火山の表情に触れることができます。





① 火山の物語

那須の火山は、数十万年前から今この瞬間まで
休むことなく、厳しい試練を与える父でもあり、
恵みを育む母としてあり続けている。

父と母なる ストーリー

この大地に立つと、足の裏から遠い記憶が伝わってくるような感覚に包まれることがあります。それは、この
那須の風景を創り上げてきた、巨大なエネルギーの物語。
何十万年もの昔から、この地の地下深くで燃え続け、
今この瞬間も、静かに、しかし確かに鼓動を続ける
火山の物語です。

その火山は、まるで厳格な父のような顔を持っています。一度怒れば、空を焦がすほどの噴煙を上げ、
灼熱の流れで大地を覆い尽くし、それまであったすべての形を無に帰してしまふ。幾度となくこの
那須に試練をもたらしました。殺生石の荒涼とした風景や、
茶臼岳・朝日岳の険しい山肌は、その父が刻んだ、逆らうことのできない力の証です。私たちに、
自然への畏敬の念を静かに、そして厳しく教えてくれます。

しかし、その父なる降り積もった火山は、同時にこの
上なく慈愛に満ちた母の顔も持っています。降り積もった
火山灰は、やがて豊かな土壌となり、標高ごとに異なる
木々を育て、花を咲かせ、動物たちの命を育むゆりかご
となりました。山麓に広がる酪農地帯ののどかな風景や、
彩り豊かな花畑、そして私たちの心と身体を芯から温めてくれる
数々の温泉は、すべて母なる火山の優しさがもたらした、
かけがえのない恵みです。

厳しさと優しさ。破壊と創造。その両極を内に秘め、
絶え間ない活動が続ける火山。その大きな腕の中で、
私たちは生かされています。この父性と母性が織りなす
壮大な物語の上で、あなたは今日、どんな足跡を刻みますか。

テーマの目的

火山の二面性(破壊と創造、厳しさと優しさ)を理解し、
火山活動が那須の地形と生態系、そして人の営みの基盤を作り上げたことを認識する。



物語の奥にあるもの

ストーリーの解説

この物語で描きたかったのは、那須の風景を単なる美しい自然として捉えるのではなく、その背後にある火山のダイナミックスな営みを感じてもらうことです。昔ながらの父と母という比喻を用いることで、火山がもたらす厳しさと恵みという二面性を訪れた方が直感的に、そして深く理解できるようにと考えました。訪れる方自身が、この壮大な物語の中に身を置き、風景と対話し、自らもその物語の一部となる。そんな体験の入り口となることを目指しています。

資源の解説

物語の中に登場する父が刻んだ力の証とは、今も火山ガスを噴出する茶臼岳の荒々しい山肌や、草木の生えない殺生石の風景を指しています。これらは、火山の持つ破壊的なエネルギーと、生命を寄せ付けない厳しさを象徴する資源です。例えば、火山の硫黄分を含む厳しい「那須おろし」という風は、高い木の生育を妨げ、笹などの低い植生が広がる独特の景観を生み出しました。それがかつてこの地に13ものスキー場が存在した理由であり、厳しさが人の楽しみという恵みを生んだ一例とも言えるでしょう。一方、母なる火山の優しさは、地下深くから湧き出る温泉や、火山灰の土壌が育んだ那須の豊かな自然、そしてその恩恵を受けて発展した酪農や農業などの人々の営みを表しています。この対照的な資源を巡ることで、火山の二面性を身体で感じ取ることができます。

感じ取ってほしいメッセージ

火山の持つ圧倒的な力と優しさの共存、地球の営みとしての火山活動、火山が作り出した大地の上に成り立つ生命の営み、自然の厳しさと恵みへの畏敬の念。

探求を促す「問い」の解説

物語の最後に置かれた「あなたは今日、どんな足跡を刻みますか」という問いは、この物語を締めくくるときの問いではありません。むしろ、これから訪れる方自身の新しい物語を始めていただくためのものです。火山の父性と母性が創り上げたこの舞台の上で、何を感じ、何を考え、どう過ごすのか。その選択の一つひとつが、あなただけの那須の物語を紡いでいく。この問いは、訪れた方が受け身の観光客から、物語の主役へと変わるきっかけとなることを意図しています。

自身が物語となる問い

父なる山の厳しさと、母なる大地の優しさ。この雄大な風景に、あなたのどのような記憶が重なるでしょうか。そして、この旅で見つけたものを、ひとつ心に仕舞って持ち帰ってみてください。それは那須の自然の厳しさかもしれません。または風の音や、木々の香りのような小さな恵みかもしれません。それらはあなたの明日をどのように温めてくれるのでしょうか。那須の自然に心で問いかけるとき、この地の物語とあなたの人生が交差し、新たな一章が幕を開けるかもしれません。



① 火山の物語

テーマを感じられる 資源・体験

那須岳の荒々しい岩肌と噴気を間近で観察し、今も生きている火山の姿を目に焼き付ける。那須高原の緑豊かな牧草地や森林を眺め、火山灰土壌が育む豊かさを観察する。植生の垂直分布を観察しながら歩き、標高によって植物が変わる理由を火山地形と結びつけて理解する。

一那須ロープウェイ

火山の父性である、荒々しい山肌と雄大な景色を体感する。



一殺生石

茶臼岳の山麓にありながら、火山の父性である荒々しい表情と息吹を間近に感じられる場所。



一那須平成の森

火山灰土壌が育んだ母性である豊かな森を歩き、生命の力強さと自然の再生を感じる。



一那須温泉

殺生石のすぐそばに湧き出る母性の象徴。厳しさと恵みが隣り合わせであることを体感できます。



那須高原の牧場・酪農地帯 (那須町・那須塩原市)

火山灰土壌という母性の恵みを活かした、那須を象徴する風景。



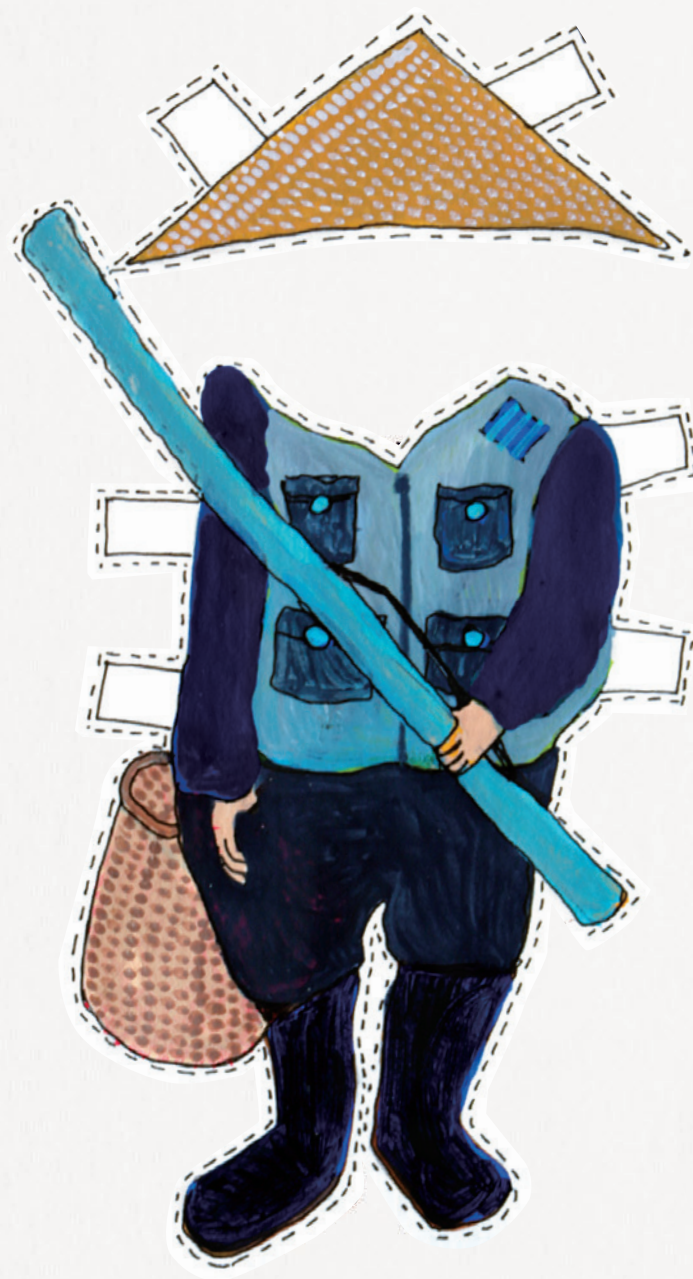
八幡の ツツジ 群落

火山性土壌と人の営み(放牧)が共創した、母性の恵みを感じる景観。



② 水の物語

自然の圧倒的なポテンシャル



なす爺は釣り好き。
毎年アユ釣りの解禁日が近づく
と、ソワソワして眠れないらしい。
雷と那珂川のおかげで米や酒もう
まいが口グセ。那珂川と酒を語
らせたなら右に出るものはいない
らしい。

那須を大好きになるストーリー集





② 水の物語

那須の山に降った雨は、清らかな
那珂川の源流となり、森を育て、
里を潤し、関東きつての清流として
命をつなぐ。

清流のはじまりの ストーリー

那須の山々に、しつとりと雨が降る音。その一滴が、木の葉を伝い、苔むした岩を滑り、大地に染み込んでいくところを想像してみてください。それは、壮大な旅のはじまりです。地下深くで磨かれ、やがて冷たい湧き水として再び光のもとへ現れた水は、細い流れとなり、仲間と出会いながら、関東きつての清流「那珂川」という大きな命の流れを創り出していきます。

この流れは、まず自らを育んだ山麓の森を豊かに潤します。木々は水を蓄え、たくさん生き物たちの隠れ家となり、森全体がひとつの巨大なダムのように、ゆつくりと、絶え間なく、下流へと命の水を送り出します。

やがて山を抜け、里へとたどり着いた流れは、田畑を潤し、人々の暮らしを支えます。この水が、どれほど多くの命を育み、どれほど遠くまで旅をしていくことでしょう。那須の山々が、私たちのほるか下流にある暮らしや、150 kmの先にある海までも支えている、大切な水源地なのです。

あなたが今、那須の森で耳にする沢の音は、これからたくさん命と出会う、清らかな旅のはじまりの歌声です。その一滴に、どんな物語の続きを思い描きますか。

テーマの目的

那須の山岳地帯に降る雨が、那珂川という清流の源流となり、森林生態系を育み、人々の暮らしを支え、広域にわたって生命を繋いでいく水の循環と役割を理解する。一滴の雨が山から海へと旅をする過程で、多様な命と暮らしを支えている水の連続性と、那須が持つ「水源地」としての重要性を認識する。

物語の奥にあるもの

ストーリーの解説

この物語で描きたかったのは、那須の美しい風景の根幹にある水の存在です。そして、その水が、山に降る一滴の雨から始まり、那珂川という大河となつて多くの命を育む、壮大な循環の物語であることです。来訪者が那須の森や沢で感じる清らかさが、単なるその場の心地よさではなく、広大な下流域の暮らしや生態系と繋がっている水源地としての価値であることを感じていただくことを目指しました。来訪者自身が、その壮大な旅のはじまりの地に立つ目撃者であると感じられればと思います。

資源の解説

物語の中に登場する「那珂川」とその源流は、このテーマの核心です。それは、単なる川ではなく、森と里と海をつなぐ命の帯の象徴です。また、その水を育む山麓の森や、その水によって営まれる里の田畑も、この物語を構成する大切な資源です。駒止の滝のような景勝地は、その水の旅が織りなす美しい場面と言えるでしょう。これらの資源は、来訪者が物語の世界と現実の風景とを結びつけるための、大切な道しるべとなります。



感じ取ってほしいメッセージ

山に降った一滴の雨が、やがて大きな川となり、多くの命を育む過程の美しさと神秘性。水が森を育て、田畑を潤し、人々の暮らしを支え、生き物たちの命をつなぐ、かけがえのない存在であること。那須が関東平野を潤す清流の源流域であり、下流域の多くの命と暮らしを支えている水源地としての役割と価値。

探求を促す「問い」の解説

「その一滴に、どんな物語の続きを思い描きますか」という問いは、来訪者に内面との対話を促すためのものです。目の前の清流が、この先どこへ流れ、誰を潤し、どんな命を育むのか。その続きを想像することで、水の循環（自然）と自分（下流の生活者）との間に、個人的で、実感のこもった特別な関係が生まれます。その感覚こそが、那須での体験を忘れられないものに変える鍵となると考えています。

自身が物語となる問い

この森で一杯の水を飲むとしたら、どんな味がするでしょう。この水が育んだ恵みを、あなたは誰と分かち合いたいですか。もしこの最初の一滴が言葉を話すなら、あなたに何を語りかけるでしょうか。那須の清流に耳を澄ませるとき、あなたの日常と、この大いなる水の旅が、確かに繋がっていくはずです。



② 水の物語

テーマを感じられる 資源・体験

那須の山々に降る雨を実際に感じ、その雨がどこへ流れていくのかを想像する。那珂川の源流域を訪れ、透明度の高い清らかな水に触れ、その冷たさと清らかさを五感で体感する。森の中を歩きながら、木々が水を蓄え、ゆつくりと川へ送り出している様子を観察する。那須から関東平野へと水が旅をする道のりをたどり、どれだけ多くの地域を潤しているかを知る。地元の農家や住民から、那珂川の水がどのように暮らしや農業を支えているかの話を聞く。川辺で水生生物を観察し、清流だからこそ生息できる生き物たちの多様性を発見する。水源地としての那須を守る取り組みや、森林保全活動について学び、自分にできることを考える。

一乙女の滝

火山地形と水が織りなす美しい景観。森が水を育んでいることを実感できます。



一那須平成の森

豊かな森を歩き、水源涵養林としての役割を肌で感じることができます。



一駒止の滝

那須連山を源とする水が流れ落ちる、壮大な滝。水の旅の力強さを感じられます。



一那珂川での川遊び・釣り・カヌー

関東きつての清流を全身で体感。



一なかがわ水遊園

那珂川の豊かな自然や文化を体感できる、栃木県唯一の水族館です。那珂川流域でみられる魚たちを間近で観察できます。



一那須野が原の田園風景

那須連山からの水が、広大な穀倉地帯を支えていることを実感できます。



一黒羽

那珂川中流域。芭蕉も愛した川と里の風景が広がり、水の恵みと共に生きてきた文化に触れます。アユなどの水生生物は、清流の証です。





② 水の物語

那須エリアのおいしいお米、
おいしいお酒の秘密は、那珂川の
水が多く自然と、携わってきた人々の
協力の証にある。

めぐり、めぐって、 この一粒のストーリー

目の前にある、つやつやと輝く一粒のお米。グラスに注がれた、芳醇な香りを放つ一滴のお酒。それが、那須の山々を旅してきた水と、多くの自然、そして人々の手が織りなした、長い長い協力の物語なのだしたら。

すべては、那須連山に降る雨や雪解け水から始まりま
す。その一滴は那珂川の清流となり、広大な大地を潤しま
す。しかし、協力するのは水だけではありません。夏の空
を轟かせ、稲を脅かすように見えるあの雷さえも、実は
空気中の窒素を土壌に届け、豊かな実りをもたらす仲
間なのです。水と、土と、太陽と、そして雷。那須の自然
すべてが力を合わせ、一粒の命を育みます。

その恵みを受け取り、次の手へとつなぐのが、人々の
営みです。農家は、酪農と連携した循環型の農法で大
地を慈しみ、蔵人(杜氏)たちは、清らかな伏流水で
米を磨き、その土地の個性を酒に醸します。先人た
ちから受け継がれた知恵と、ひたむきな努力。自然
の力と、人の想いが協同し、ようやくおいしさは形作
られます。

そして今、その壮大な協力の旅の物語は、あなた
という最後の手渡し相手を待っていました。あなた
がその一粒を口に運び、その一滴を味わうとき。水
と自然と人々が紡いできた物語は、あなたの身
体の中で、どのように響き、どんな温もりとなっ
て心に刻まれていくのでしょうか。



テーマの目的

食卓で米や酒を味わう瞬間を、水を中心とした協力の物語が「形となり、味わわれ、心に刻まれる瞬間」として理解する。訪問者自身が協力の物語の最終的な受け手であり、その物語を完成させる存在であることを感じる。

物語の奥にあるもの

ストーリーの解説

この物語で描きたかったのは、那須の食材の優位性を解説することではありません。来訪者が食べるという行為を通じて、那須の自然と人の営みが織りなす協力の物語の、最後の主役になつていただくことです。食材を単なるモノとして消費するのではなく、その背景にある水や自然、人々の想いを受け取り、味わうことで、その物語を完成させる。そんな、食べるという行為の持つ豊かさ、と、那須という土地との深いつながりを感じていただくことを目指しました。と思います。

資源の解説

物語を構成する「協同」の要素は、すべて那須の地に根ざした資源から着想を得ています。物語の中心を貫く那珂川の水、そしておいしいお米。これらは、人と自然の協力の象徴です。特に、那須の気候がもたらす雷さえも実り(お米の美味しさに繋がるという事実は、自然の力の不思議な協力を物語る、那須ならではの資源です。また、酪農と連携した循環型農業の伝統や、清流を活かした100年以上の歴史がある日本酒造りは、人が自然と協同するために築いてきた知恵と文化の証しとして、物語に深みを与えています。

感じ取ってほしいメッセージ

自分が協力の物語の一部であること。食べるという行為が物語を完成させること。一滴の水から始まる壮大な協力の旅。協力の物語が自分の心に刻まれること。食べることの意味の深さ。

探求を促す「問い」の解説

物語の最後、「・・・あなたの身体の中で、どのように響き、どんな温もりとなつて心に刻まれていくのでしょうか」という問いは、来訪者に答えを求めるものではありません。それは、味わうという瞬間に、意識を集中していただくためのものです。口に広がる味わいの中に、山から来た水の旅路や、雷の力、農家や蔵人の顔を想像してみる。その瞬間、食べるという行為は、那須の壮大な物語とあなた自身とを結びつける、かけがえない体験へと変わっていきます。

自身が物語となる問い

この一杯の水が、どんな旅をしてきたか、想像したことはありませんか。この一粒の米を育てたのは、どんな人たちの笑顔でしょう。あなたがおいしいと感じるその瞬間に、何百年と続いていた那須の自然と人の協力の物語が、確かにあなたへと受け継がれるのです。



② 水の物語

テーマを感じられる 資源・体験

米や酒を味わいながら、その中に込められた協同の物語を感じる体験、食事をしながら、自分が物語の一部であることを実感する体験、二粒の米や一滴の酒の中に、水の旅を発見する体験、食えることを通して、協同の意味を深く理解する体験。

大田原市内 の酒蔵

那珂川の伏流水や那須連山の雪解け水で酒造りを行う蔵元。協同の結晶である日本酒の試飲や見学ができます。



那須岳麓の 田園風景

那須連山を背景に広がる「那須ひかり」などの米どころ。水の旅と協同の舞台を一望できます。



農産物直売所

農家の人々が育てたお米や野菜が並びます。作り手という協同の担い手に触れられる場所。



地元の米や酒を 提供する

飲食店・宿泊施設

協同の物語の最終章を、その土地の空気の中で味わう体験。



那須疏水

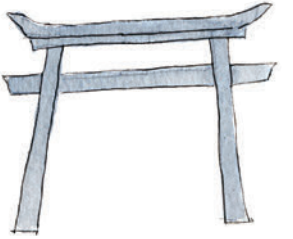
明治の開拓を支えた水路。水と人の協同の歴史を象徴する場所です。



那須エリアの ワイナリーやブルワリー

米や酒だけでなく、火山由来の土壌や良質な水が、ワインやビールといった新たな協同の物語も生み出しています。





那須を大好きになるストーリー集

暮らしと風土を生み
歴史を紡いできた人のポテンシャル

③ 人の物語



なす爺は信心深い。
山岳信仰が盛んだった土地柄、初詣
はあちこちに出没する。もしかすると
厳しい土壌だったこの地を拓いた
先人たちへの感謝なのかも。
那須の開拓史を語らせたら右に出
るものはいない、らしい。



3 人の物語

那須の人々は、自然の脅威と恵みの中で生きるために、源泉を御神体とする山岳信仰を育み、祈りを通じて自然への感謝と畏怖を千年以上つないできた。

千年の祈りのストーリー

あなたがいま浸かっているこの温かい湯が、千年以上もの間、人々が手を合わせ、祈りを捧げてきた神聖な場所だとしたら、どんな想いがするでしょうか。

那須の火山は、人々に豊かな温泉という恵みを与え、と同時に、ひとたび荒ぶればすべてを奪い去る、畏るべき存在でもありました。人々は、その圧倒的な自然の力をねじ伏せるのではなく、あるがままに受け入れ、共に生きる道を選びました。その知恵こそが、この地に根付いた信仰のはじまりです。

彼らは、温泉の源泉そのものを「御神体」として拝みました。それは、自然の厳しき、その脅威の真つ只中にこそ、生かされていることへの感謝と恵みの本質が宿る、と知っていたからかもしれません。そして、その祈りを二過性のものにせず、確かに次の世代へと手渡すために、人々は神社を建て、感謝と畏怖の心を形にしてきましたのです。

この湯は、単なる温かい水ではありません。それは、自然の厳しきの中で、恵みを見出し、感謝を忘れたかった千年前の人々から、あなたへと続く祈りのリレーそのもの。湯けむりの向こうに、途切れることなく続いてきた人々の温泉への想いが見えるようです。あなたは、この温もりの中に、どんな祈りを重ねますか。

テーマの目的

源泉を御神体とする信仰が、単なる過去の習慣ではなく、世代を超えて受け継がれてきた人々の自然観であることを理解する。

物語の奥にあるもの

ストーリーの解説

この物語で描きたかったのは、温泉という恵みの背後にある、火山の脅威と、それに向き合ってきた人々の祈りです。来訪者が体験する温泉に浸かるという行為が、実は千年以上続く祈りの手渡し場に立ち会うことでもある、と感じていただくことを目指しました。単なる観光客としてではなく、那須の自然と人の営みが紡いできた、世代を超える物語の当事者として、その温もりを感じてもらえたらと思います。

資源の解説

物語に登場する源泉（御神体）は、このテーマの核心です。那須の火山がもたらす噴煙や荒涼とした地形は、古くから人々に畏怖の念を抱かせ、信仰の対象となってきました。那須には主に二つの山岳信仰が息づいています。一つは高湯山（たかゆさん）信仰、もう一つは白湯山（はくゆさん）信仰であり、これらは遠く山形県（やまがた）の月山（がつさん）信仰とも繋がりをしています。特に高湯山信仰の御宝前のように、火山の息吹を最も強く感じる場所を聖地とした事実は、自然の厳しき（畏怖）と恵み（感謝）が不可分であるという、この土地の自然観を象徴しています。かつて、地図上で那須より北は黄泉（よみ）の世界と認識される時代がありました。茶臼岳（ちうづだけ）から立ち上る噴煙が視界を遮り、その向こう側を黄泉の国と想像させたのかもしれませんが。この神秘性こそが、信仰の揺るぎない土台となっています。「那須温泉神社」は、そうした目に見えない祈りや自然観を形にし、コミュニティの拠り所として、千年という時間を超えて手渡すために不可欠な場所であり続けています。

感じ取ってほしいメッセージ

自然の恵みに対する深い感謝の心。自然への感謝と畏怖が同時に存在することの意味。世代を超えて受け継がれる想いの尊さ。人と自然が共生してきた歴史の重み。現代にも続く自然への敬意。

探求を促す「問い」の解説

「あなたはこの温もりの中に、どんな祈りを重ねますか」という問いは、来訪者に内面との対話を促すためのものです。千年前の人々が捧げた祈り。それは、現代に生きる私たち自身の健やかに生きたい、大切な人を守りたいという根源的な願いと、どこかで繋がっているはずです。この湯を介して、過去と現在が交差し、あなた自身の自然への想いを見つめ直すきっかけを提供したいと考えました。

自身が物語となる問い

もし、あなたが千年前、源泉の前に一人で立ったとしたら、どんな感情が湧き上がるでしょう。そして、何を祈るでしょうか。あなたが今、当たり前のように受け取っているこの恵み。それを未来へ手渡すために、私たちにできることは何でしょう。湯けむりに包まれ、静かに想いを巡らすひとときが、きっとあなたの特別な物語となって心に残るでしょう。



③ 人の物語

テーマを感じられる 資源・体験

温泉に浸かりながら、この湯を神聖なものとして大切にしてきた人々の想いに触れる。源泉や那須温泉神社を訪れ、自然への感謝を形にしている文化を体感する。地域の人々が今も大切にしている自然との関わり方を知る。自分自身の自然観を見つめ直すきっかけを得る。

那須 温泉神社

鹿の湯と共に歴史を刻む、山岳信仰の中心地。手渡されてきた祈りの形に触れられます。



鳥瞰図 写真提供/那須音語館

板室温泉 神社

(那須塩原市)

白湯山信仰の中心地。那須岳の別の側面に対する信仰の形に触れられます。



三斗小屋 温泉

歩いてしか行けない秘湯。山岳信仰と共に歩んできた湯治場の歴史を感じさせます。



雲巖寺

(黒羽・大田原市)

山々に抱かれた禅寺。修験道とも縁が深く、山に対する人々の敬虔な祈りの空気を感じられます。



鹿の湯

1400年近い歴史を持つ温泉。その源泉地帯は、まさに信仰の対象であった場所の面影を残します。





③ 人の物語

那須の街道は千年以上も前から
旅人たちが出会い、互いの物語が
交差し、この地に文化を編み
続けてきた交流の舞台である。

物語が交差する 道のストーリー

あなたが今立っているこの道が、千年以上も前から、
数え切れないほどの旅人たちが行き交った道だと想
像してみてください。

なぜ、これほど多くの人々がこの地を目指し、あるい
はこの地を通り過ぎていったのでしょうか。

それは、地図を広げてみればすぐにわかります。ここ
那須は、広大な関東平野が終わりを告げ、みちのく
（東北地方）へと続く山々が始まる場所。つまり、日本の
中心部と北国とを結ぶ道が、ぎゅつと二つに集まる結び
目だったのです。都から北を目指すにも、北から都へ向
かうにも、誰もが必ず通らなければならない関門のよ
うな場所。それこそが、那須がかなめとなる場所と呼
ばれる理由です。

だからこそ、那須の街道は、ただ目的地へと向かうた
めだけの道ではありませんでした。人、モノ、情報、文化
…そのすべてが、この地で出会い、互いの物語が交差す
る舞台となったのです。

遠い都から運ばれてきた政治や文化、北の地で育ま
れた知恵や産物、そして旅人同士が宿場町や茶屋で
交わした何気ない世間話。それらすべてがこの道を
通って運ばれ、この地で出会い、混ざり合い、ゆつくりと
時間をかけて那須の文化という一枚の美しい織物へと
編み上げられてきました。

あなたは今日、この歴史の交差点でどんな物語に出
会い、そして、あなた自身のどんな物語をこの地に残し
ていくのでしょうか。一歩踏み出すあなたの足跡もまた、
千年続く物語の、新たなページとなるのです。

テーマの目的

街道での出会いが単なる通過で
なく、文化創造の源泉であったこ
とを理解してもらい、人と人との
交流が地域文化を育んできたこと
を実感する。また、その背景とし
て、那須が関東と東北を結ぶ地理
的に重要な「かなめとなる場所」で
あった歴史的重要性を知る。

物語の奥にあるもの

ストーリーの解説

この物語で描きたかったのは、那須の街道を、単なる交通路と
してではなく、文化が生まれ、編まれてきた交流の舞台として
捉え直すことです。なぜ那須がそれほどまでに重要な交流の舞
台となり得たのか。それは、この地が関東平野の終端という地理
的な理由から、人やモノの流れが集中する結び目、かなめとな
る場所であったからです。来訪者が街道の跡を歩くとき、そこ
で交わされたであろう無数の人々の出会いや物語に思いを馳せ
てもらうことを目指しました。

資源の解説

那須エリアが関東と東北地方を結ぶ交流点であった歴史は
古く、縄文時代にまで遡ります。古代には、奈良時代の大宝律令
によつて東山道が整備され、遠い都（奈良）と東北地方を結ぶ礎
となりました。源義経の逃避行や、西行法師の歌枕の旅など、多
くの歴史的な旅がこの地を舞台とし、那須の与一の伝説や地域の
民俗芸能にも深い影響を与えてきました。江戸時代に入ると、こ
れらの道はさらに重要な役割を担います。エリアの東部を通る
奥州街道は五街道の一つとして整備され、那須エリア内にも大田
原、咲山、鍋掛、腰堀、芦野といった宿場町が置かれ多くの人や物
資が行き交いました。また、エリアの西部には、会津と江戸を結
ぶ重要な交易路であった会津西街道（下野街道）が通り、関谷
（那須塩原市）などの宿場が賑わいを見せました。この会津西街
道が、1683年の日光大地震で出現した五十里湖（いかりこ）
によつて長期間不通となった際、会津藩の年貢米を江戸へ運ぶ代
替路として急遽整備されたのが会津中街道です。この道は那須
エリアの板室や三斗小屋を通り、大峠を越えて会津へと抜ける
険しい道筋でしたが、那須が会津と江戸を結ぶ重要な結節点で
あったことを示す、もう一つの物語です。特に松尾芭蕉は「おくの
ほそ道の旅で那須エリアと深く関わり、黒羽で13日間、那須町
で4日間滞在しました。遊行柳で千年前の西行の物語に心を重
ね、殺生石を訪れるなど、街道が時間を超えて物語を交差させ
る舞台であることを象徴的に示しています。芦野や伊王野（奥州
街道）、関谷（会津西街道）に残る宿場町の面影は、かつての交流
の賑わいを想像させ、物語への没入感を深めてくれます。

感じ取ってほしいメッセージ

出会いの持つ創造的な力。物語や知識の交換がもたらす豊か
さ。地域文化が外部との交流によつて育まれてきたこと。那須が
日本の大動脈として果たしてきた役割。一人ひとりが文化の担
い手であること。

探求を促す「問い」の解説

「あなたは今日、この街道でどんな物語に出会い、そして、あな
た自身のどんな物語をこの地に残していくのでしょうか」という問
いは、来訪者を受け身の観光客から、文化を編む現代の旅人へと
変えるためのものです。この地を訪れ、何かを感じ、誰かと話す
こと。その一つひとつが、千年続く那須の物語に新たな糸を加え、
未来へと文化を編み続ける行為そのものであると気づく。それ
が、この問いに込めた想いです。

自身が物語となる問い

もし、あなたが江戸時代の旅人としてこの宿場町に着いたな
ら、茶屋で隣り合った人に、どんな故郷の話をするか。あなたが
この旅で出会った小さな発見や感動は、千年後の未来に、どんな
物語として伝わっているでしょうか。この道を歩くとき、すれ違う風
の音に、かつての旅人たちのどんな声が聞こえてくるでしょうか。



③ 人の物語

テーマを感じられる 資源・体験

宿場町や茶屋での人々の交流の様子を想像する、異なる地域からの情報や文化が混ざり合う場面を思い描く、現代の自分も文化の担い手の一人であることを自覚する、地域の文化的特徴が交流から生まれたことを発見する。

芦野・伊王野の 古い町並み散策

かつての宿場町の面影が残るエリア。往時の旅人たちの交流を想像しながら歩くことができます。



奥州街道 (東山道) の旧街道

白河の関へと続く道筋。義経や芭蕉も歩いたとされる道を辿り、歴史の交差を体感できます。



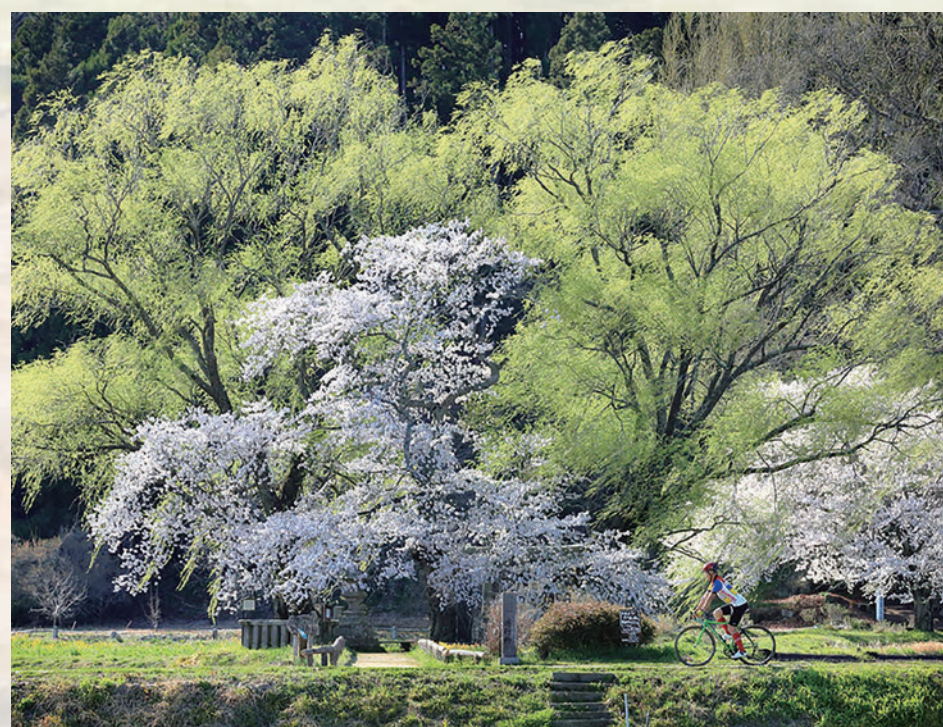
白河の関 (福島県白河市)

那須エリアとみちのくの境界。多くの旅人にとって物語の転換点となった場所の空気を感じられます。



遊行柳 (那須町)

松尾芭蕉が訪れ、千年前の歌人の物語に想いを馳せた場所。物語が交差する舞台を象徴する場所です。



地域の 茶屋やカフェ

現代の宿場町。旅人(来訪者)と地域の人が出会い、新たな物語が交差する場所です。



那須 歴史 探訪館

街道の歴史や、この地で交差した文化の軌跡を知ることができます。





3 人の物語

那須の史実や伝承、伝説は
この地を訪れ、愛し、生きた人々が
時代を超えて紡いできた色とりどりの
物語として生き続けている。

色とりどりの 糸のストーリー



なぜ、この那須の地には、これほどまでに色とりどりの物語が息づいているのでしょうか。ある糸は都の雅を伝え、ある糸は北国の厳しさを語り、またある糸は名もなき旅人のため息を秘めているかもしれません。

荒々しい火山の息吹が、恐ろしい九尾の狐の伝説を生み出しました。平安の武人・那須与二が扇の的を射抜いたという史実は、今も那須温泉神社に誇り高く残ります。兄に追われた源義経の無念は、道端の岩に伝承としてその名を刻みました。江戸の俳人・松尾芭蕉は、伝説の石（殺生石）の前に現実の風に吹かれ、思索にふけりました。

史実・伝承、そして伝説。これらはバラバラの出来事ではなく、この土地で出会うべくして出会った、運命の糸でした。この土地の現実と、人々の想いが出会うとき、新たな物語が生まれるのです。そして、その糸は那須の地に留まらず、能や歌舞伎の題材として遠い都まで旅をし、日本文化という大きな織物の一部となりました。

それらは、この地を訪れ、愛し、あるいは恐れ、そして生きた人々の想いそのものです。彼らが残した色とりどりの糸は、今、あなたの目の前にあります。あなたがこの道を歩き、この風に吹かれるとき、あなたはどの糸に触れ、どんな新しい色をこの織物に加えることになるのでしょうか。

テーマの目的

那須の物語が一つの時代や一人の人物によるものではなく、多くの人々が時代を超えて積み重ねてきた集合的な創造物であることを理解する。那須が物語の発信地として、その伝説や伝承が全国に伝播していった歴史を知る。

物語の奥にあるもの

ストーリーの解説

那須の豊かさを、特定の資源ではなく、時代を超えて人々が紡いできた物語の集積として捉えることを目指しました。那須の自然と歴史的な事実（史実）、そして人々の想像力や願いが生んだ（伝承・伝説）のすべてが等しくこの土地の魅力を形作っている大切な要素であることを感じてほしくて、このような物語を紡ぎました。

資源の解説

「旧奥州街道や「殺生石」温泉神社」などは、それぞれが独立した物語を持っています。しかし、それらが同じ場所で重なり合っていることが、那須の文化的な深みを示しています。例えば、芭蕉が訪れた殺生石は、彼が訪れるずっと前から「玉藻の前」の伝説の地であり、さらに古くは山岳信仰の対象でした。異なる時代の物語が、地層のように重なっていることが、この土地の奥深さと言えるでしょう。

●殺生石

「伝説」九尾の狐「玉藻の前」：物語は平安時代、鳥羽上皇を惑わせた絶世の美女「玉藻の前」に遡ります。その正体はインド、中国を経て日本に来た九尾の狐でした。陰陽師・安倍泰成に見破られた狐は那須野へ逃れ退治されますが、その怨念は毒石殺生石となりました。

「信仰」玄翁和尚：毒をまき散らし続けた殺生石を、室町時代の玄翁和尚が仏法で打ち砕いたという伝承（謡曲「殺生石」）が加わります。これは自然の脅威を信仰の力で鎮めるという、人々の願いが加わった新たな物語です。

「文学」松尾芭蕉の訪問：江戸時代、芭蕉がおくのはそ道でこの地を訪れ、「石の香や 夏草亦く 露あつし」と詠みます。伝説の地に立つ芭蕉の感動が、文学という新しい糸を織り込みました。

那須の伝説は、この地にとどまりませんでした。特に江戸時代、この物語は浄瑠璃や歌舞伎（例：玉藻前職袂）たまものまゑあさひのたもと）の格好の題材として脚色され、大衆の人気を博しました。また、浮世絵にも玉藻の前や殺生石は繰り返し描かれ、恐ろしくも美しい妖怪九尾の狐のイメージを日本全国に定着させました。那須の殺生石は、二つの地域の物語が全国の文化にどれほど大きな影響を与えたかを示す、生きた証拠とも言えます。

●那須温泉神社

「伝説」鹿の湯の発見：創始は約1400年前。狩ノ三郎行広が、射損じた白鹿を追って山に入ると、鹿が温泉で傷を癒していました。これが那須温泉の始まり。鹿の湯の発見伝説です。

「信仰」那須の与二の祈願：「平家物語」で有名な那須の与二は、屋島の戦いで扇の的を射る際、故郷の「那須温泉大明神」と必勝を祈願したと伝わります。個人の武勲という史実が、地域の「信仰」と強く結びついた瞬間です。

「史実」湯治と山岳信仰：古くから那須岳は修験道の山であり、那須温泉は信仰登山の前に身を清めるお行の湯とも呼ばれました。芭蕉も参詣しており、湯治場として、また信仰の拠点として栄えた史実があります。

●義経岩

「史実」義経の逃避行：源頼朝に追われた源義経一行が、奥州平泉の藤原氏を頼って落ち延びたという史実が背景にあります。

「伝承」雨宿りと弁慶の力比べ：その道中、にわか雨にあった一行が、弁慶が持ち上げたというこの岩陰で雨宿りをしたという伝承が生まれました（「雨晴」の地名由来とも）。また、弁慶が武運を占うために岩に矢を刺したという矢の根石の伝説も残ります。これらは、悲劇の英雄・義経一行への人々の同情や畏敬の想いが、街道沿いの風景に重ねられた物語です。

感じ取ってほしいメッセージ

多様な人々がそれぞれの想いを込めて残してきた物語の豊かさ。那須が物語を生み出す力を持つ場所であること。物語が人から人へ、土地から土地へと旅をすること。

探求を促す「問い」の解説

物語の最後にある「あなたはどの糸に触れ、どんな新しい色をこの織物に加えることになるのでしょうか。」という問いは、あなたを物語の傍観者から主役へと誘うための問いかけです。那須に息づく無数の物語は、決して過去のものではなく、今も新しい出会いを待っています。あなたがこの地で何を感じ、何を思うか。そのこと自体が、この土地の古い織物に新しい糸を一本加える、かけがえない行為であると伝えられたのです。

自身が物語となる問い

物語は、博物館のガラスケースに収められた過去の遺産ではありません。それは今も生きていて、新しい語り手を待っています。あなたが旅で出会った風景や人々の言葉に心を動かされたなら、それもまた新しい物語のはじまり。あなたはこの地で、どんな物語の主人公になりますか。



③ 人の物語

テーマを感じられる 資源・体験

史実や伝承に触れながら、それらが那須という土地の力によって生まれ、人々の手によって遠くまで運ばれていった軌跡を発見する体験。伝承や伝説を通じて過去の人々の想いを感じる。自分も物語を紡ぐ一員であると感じる体験。

旧奥州街道

街道沿いに残る宿場町の面影、道祖神、馬頭観音。



遊行柳 (那須町)

西行法師や松尾芭蕉も歌に詠んだ、道のほとりに佇む柳。



殺生石

玉藻の前伝説と松尾芭蕉の足跡が重なる、火山の息吹を感じる場所。



那須 温泉 神社

温泉の発見を機に建立され、多くの人々の信仰を集めてきた歴史。



那須 歴史 探訪館

街道の歴史や、この地で交差した文化の軌跡を知ることができます。



義経岩

源義経が奥州へ向かう途中に立ち寄ったとされる伝説の地。



黒羽

松尾芭蕉が長く逗留した「おくのほそ道」の重要な地点。





3 人の物語

那須の自然の彩りは、
人々が土地の声を聞き、
馬とともに歩み、自然のリズムに
寄り添って暮らしを重ねてきた
対話の軌跡である。

風景に刻まれた

ストーリー

那須の森を歩くと、木々の間を抜ける
光が、まるで古い記憶の断片のように足
元に落ちてきます。春に燃えるような
赤色で山肌を染め上げるツツジの群
れ。それらは、ただそこにある自然ではな
く、遠い昔から続く、人と自然との静かな対
話が描いた軌跡なのかもしれません。

火山という厳しい大地を受け入れた人々
は、自然を力で支配するのではなく、その声に
耳を澄まし、共に生きる道を選びました。彼ら
は森に入り、暮らしの薪を得るために木を切
りました。しかし、それは一方的な収奪ではあ
りません。森が再生するリズムを知り、切った場
所がやがて若返るように、次の世代のために森を手
入れする。それは、森と交わした命の約束のような
ものでした。

この地ではかつて、馬たちも大切な家族であり、働
き手でした。山に放たれた馬は、自由に草を食みま
す。けれど、ある特定の植物だけは、その毒を知つて
か、不思議と口にすることはありませんでした。それ
が、ツツジでした。馬たちが他の草を食み、大地を整
える一方で、ツツジだけが残り、年々その花を咲き誇
らせていく。

いま目の前にある息をのむようなツツジの彩り
や、若々しい森の緑は、人が設計した庭園とは違いま
す。それは、人が自然のリズムに寄り添い、馬と共に
歩んだ、何世代にもわたる暮らしの営みが、思いがけ
ず風景に刻み込んだ対話の証なのです。この美しい
風景は、私たちに何を語りかけているのでしょうか。

テーマの目的

那須の風景が人々と自然との長い
対話の結果であることを伝える。
一方的な自然の利用でも、自然へ
の単なる服従でもなく、自然の声
を聞きながら暮らし方を模索して
きた人々の姿勢を理解する。

物語の奥にあるもの

ストーリーの解説

那須の代表的な風景であるツツジや森が、実は人の営みと深
く結びついていることを描きたいと考えました。それは、自然を
征服するのではなく、あるいは手つかずのまま保護するのではな
く、自然のサイクルに人が寄り添い、関わり続けることで生ま
れてきた第三の風景とも言えるものです。この物語は、その美し
い関係性に光を当てていくことを目指しました。

資源の解説

「八幡のツツジ」の群生は、このテーマを象徴する風景です。か
つてこの地は火山性土壌で田畑に不向きだったため、軍馬や農
耕馬としての「那須駒」の生産が盛んに行われました。山に放牧
された馬たちが、毒のあるツツジを避けて他の草を食んだこと
で、見事なツツジの群落が奇跡的に育まれたと言われています。
人の営みと自然の特性が織りなす、意図せざる創造です。ま
た、里山に広がるかつての薪炭林は、当時の人々が森のリズムに
合わせて木を利用し、森を常に若々しく保ってきた対話の軌跡
そのものです。那須には貴重なブナの原生林も残されています。
かつて、関東最大のスキー場計画がありました。これは、地域の
自然環境を重視する姿勢を示す象徴的な出来事でもありま
す。これもまた、人々が自然との対話を選んだ、那須の姿勢を示
す大切な物語なのです。

感じ取ってほしいメッセージ

自然と対話しながら暮らしを築くことの大切さ。持続可能
な資源利用の知恵。自然のリズムに寄り添うことで生まれる調
和。そして、その対話が美しい風景として結実していることへの
感動。

探求を促す「問い」の解説

物語の最後の「この美しい風景は、私たちに何を語りかけてい
るのでしょうか。」という問いは、あなたを単なる風景の鑑賞者か
ら、その風景を持つ物語の読み解き手へと誘うものです。風景を
答えとしてではなく、過去からの問いかけとして受け取ってほ
しい。そして、その問いかけの奥にある、人と自然の持続可能な関
係性について、想いを馳せるきっかけとなることを願っています。

自身が物語となる問い

先人たちは、馬や森と対話し、この彩り豊かな風景を私たち
に残してくれました。では、今を生きる私たちは、何と対話し、
どんな風景を未来に手渡すことができるでしょうか。あなたが
この地で感じる風、土の香り、木々のささやき。それらすべてが、
あなたに語りかける土地の声かもしれません。あなたはこの地
で、どんな新しい対話を始めますか。



③ 人の物語

テーマを感じられる 資源・体験

薪炭林の若い木々を見ながら、計画的な伐採と再生のサイクルを理解する。草原の管理が、放牧という人の営みによって維持されてきたことを知る。ツツジの群生が、馬との共生の中で生まれた景観であることを発見する。現代の持続可能性の課題と、先人の知恵との共通点を見出す。

八幡の ツツジ 群落

那須駒の放牧が育んだ、人と馬と自然の対話の軌跡。



八幡ツツジの那須駒 写真提供/那須昔語館

那須 平成の森

人の手が入った森（薪炭林）と、これからの森の姿を学ぶフィールド。

那須高原 ビジター センター

那須の自然の成り立ちと、人の営みの歴史を知る。



那須 歴史探訪館

那須駒の歴史や、昔の人々の暮らしの道具に触れる。



芦野・伊王野の 里山風景

薪炭林や田畑など、人と自然が共生してきた景観。





3 人の物語

那須の風土を形づくったものは
2つの開拓であり、開拓者たちの
汗と涙、喜びと絆が、西洋的な雰囲気と
他者を受け入れるオープンマインド
として、脈々と受け継がれている。

2つの開拓の ストーリー

那須の高原を歩くと、どこか異国の風を感じる
とがあります。広々とした牧場の風景、ハイカラな建
物のたたずまい。そして、初めて訪れたはずなのに、ふ
わりと受け入れられるような、不思議な開放感。この
土地の空気は、いったどこから来たのでしょうか。

その答えは、かつて不毛の地と呼ばれたこの火山の大
地に、異なる時代を生きた人々が刻んだ、二つの力強い足
跡にあります。

すべては明治の時代、遠い西洋の文化に夢を馳せた華族た
ちが、この荒涼の原野に立つたことから始まりました。彼らが
目指したのは、日本でまだ誰も見たことのない、西洋式の広
大な農場。火山灰の不毛の地に鋤を入れることは、想像を絶
する苦難の連続であつたはずです。しかし、彼らの情熱は決
して尽きることなく、ついにこの土地に西洋的な雰囲気とい
う初めての彩りを灯したのです。

そして、時を経た戦後の荒野に、再び人々が立ちました。満
州や南方など、遠い地から生きる場所を求めて帰還した人々
です。ただ、生きるために、凍てつく火山灰の大地と真正面か
ら向き合いました。当初目指した畑作は困難を極めました
が、彼らは諦めず、互いの小さな肩を寄せ合い、やがて酪農へ
と活路を見出します。異なる背景を持つ人々が、生き抜くこ
うな点で支え合つたその経験こそが、この土地に他者を受け
入れる温かさ・オープンマインドという、かけがえのない土壌
を育んだのです。

今、私たちが感じるこの心地よい風は、この二つの開拓の物
語が溶け合つたもの。困難の中で流された汗と涙、そしてそれ
らを乗り越えた喜びと絆が、那須の風土として息づいていま
す。あなたが今、ここで深く息を吸い込むとき、その風はどん
な物語を運んできますか。

テーマの目的

明治期の華族による西洋式農場
開拓と戦後の満州引揚者による開
拓という2つの異なる開拓の歴史
が、ハイカラ文化とオープンマイ
ンドという那須の特徴を形成した
のかを理解する。開拓という行為
が単なる土地開発ではなく、人と
人との絆を紡ぎ、新しい文化と精
神を生み出す営みであったことを
感じる。

物語の奥にあるもの

ストーリーの解説

那須を訪れる多くの人が感じる西洋的な雰囲気と、移住者
や旅行者を温かく迎えるオープンマインド。この二つが、実は偶
然生まれたものではなく、明治と戦後という二つの決定的な開
拓の歴史によって育まれたということを、二つの物語として感じ
てほしくて、このストーリーは生まれました。風景の美しさだけ
でなく、その奥にある人々の汗と涙、喜びと絆の記憶に触れてい
ただけたらと願っています。

資源の解説

明治の西洋式農場開拓の面影は、今も続く広大な牧場風景
や、旧青木家那須別邸（日本遺産「明治貴族が描いた未来の那
須」の構成文化財）などに色濃く感じることができます。それら
は、当時の人々が見たハイカラな夢の証です。一方、戦後の開拓
は、満州や南方など多様な地域からの引揚者が中心となりまし
た。火山灰土壌の荒れ地は畑作に不向きで、多くの苦難の末に
酪農へと転換していった歴史があります。その苦難の歴史は那須
の殉難者慰霊碑に静かに刻まれており、彼らの営みが現在の那
須の酪農の礎となっています。

感じ取ってほしいメッセージ

困難な環境に立ち向かった開拓者たちの勇氣と希望。異なる
背景を持つ人々が互いに助け合い受け入れ合つた寛容さ。その
精神が今も那須に息づいていること。自分もその歴史の延長線
上にいるという連続性。那須が持つ温かな受容の文化の根源。

探求を促す「問い」の解説

物語の最後の「その風はどんな物語を運んできますか。」とい
う問いは、あなたが今感じている那須の空気を、単なる現象と
してではなく、過去から吹く風として受け止めていただくため
のものです。ハイカラな雰囲気も、人の温かさも、すべては先人た
ちの営みの続き。あなたはその風の中に、自分自身の物語の「主
役」として立っているのです。

自身が物語となる問い

荒野は、二つの開拓を経て、人々を受け入れる豊かな大地と
なりました。もし、この土地の持つ寛容さや開拓者精神が、あな
たに新しい一歩を踏み出す勇氣をくれるとしたら。あなたはこ
の受け入れる大地で、どんな新しい種を蒔き、どんな花を咲かせ
たいと思いますか。



③ 人の物語

テーマを感じられる 資源・体験

那須の牧場や農場を訪れ、開拓の歴史に思いを馳せる。地元の人々との交流を通じて、受け入れられる温かさを実感する。西洋的な建築物や文化と、日本の伝統が融合した風景を体験する。開拓記念館や資料を通じて、2つの開拓の物語を知る。那須の食材を味わいながら、開拓者たちの努力の結晶を感じる。

那須 歴史 探訪館

明治と戦後、二つの開拓の苦難と希望の物語を知る。



那須高原の 広大な 牧場風景

車窓に広がる風景から、ハイカラな開拓の歴史を感じる。



旧青木家 那須別邸

明治の開拓精神と、西洋の文化が融合したハイカラな建築と物語に触れる。



千振開拓 記念碑

荒野を豊かな大地に変えた先人たちの汗と涙に思いを馳せる。



千振中集乳所

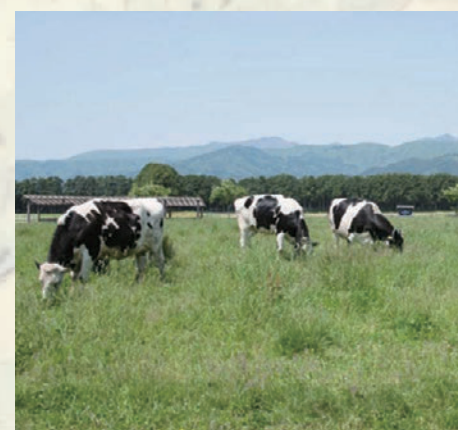
南ヶ丘牧場

牧場の風景の中で、開拓者たちが見た夢の続きを体験する。



千本松牧場

明治の西洋式農場の夢を受け継ぐ、広大な牧場風景に触れる。



牧場の 酪農製品 (チーズ、牛乳)

荒野を牧場に変えた人々の情熱が詰まった本物の味に触れる。



道の駅 那須高原 友愛の森

地元の農産物直売所で、開拓者たちの努力の結晶（酪農製品や野菜）を味わう。





3 人の物語

「食材の宝庫」と呼ばれる

那須は、この土地を愛する

職人たちが自然と対話しながら、

こだわりと想いを込めて育て

上げてきた想いの結晶である。

一皿に込められた ストーリー

那須で出会う一皿には、不思議な透明感があります。グラスに注がれた一杯の牛乳、朝露に濡れたばかりの野菜、艶やかに輝く一粒の米。そのおいしいという感覚が、単なる味覚を超えて、心の深いところまで染み通ってくるようです。

この土地は、確かに火山と水という豊かな自然に恵まれています。しかし、私たちが感じるこの滋味深さは、それだけから生まれるものではありません。

ここには、自然の機嫌をうかがい、その声に耳を澄ます職人たち（生産者）がいます。彼らは、火山灰が混じる気難しい大地と対話し、その日の風の色を読み、水のひとしずくにさえ感謝を込めます。ある人は、牛一頭一頭の小さな癖まで見抜き、家族のように寄り添います。またある人は、理想の一粒の米のために、気の遠くなるような試行錯誤を、何年も、時には何世代も続けています。

それは、彼らのこだわりであり、譲れない想いそのものです。

那須が「食材の宝庫」と呼ばれるのは、たくさんの種類の食べ物が採れるから、というだけではありません。一つひとつの食材が、この土地を愛する人々の、静かな情熱と努力、そして数えきれないほどの対話を経て生み出された想いの結晶だからです。

あなたが今、その結晶を口に運ぶとき、その一皿の向こうに、どれほど多くの手のひらと、誠実な眼差しがあるかを感じてみてください。あなたは、その瞬間、どんな物語を味わうことになるのでしょうか。

テーマの目的

那須が「食材の宝庫」と呼ばれる理由が、単なる自然環境の良さだけでなく、携わる人たち一人ひとりが自然と向き合い、試行錯誤を重ねながら育て上げた努力と想いの積み重ねであることを理解する。宝庫という言葉の背後にある、無数の生産者の物語と想いを感じる。



物語の奥にあるもの

ストーリーの解説

食材の宝庫という言葉は、ともすれば何でも揃う便利な場所という表層的なイメージを与えてしまいかもしれません。この物語で描きだしたのは、その言葉の奥深くにある、無数の人の存在です。那須の宝とは、食材というモノではなく、それを作り出す人々の想いの結晶であること。食べるという行為を通じて、その物語に触れていただくことを目指しました。

資源の解説

那須の風土は、酪農や高原野菜、米作りなど、多様な食を生み出しています。しかし、火山灰を含む大地や冷涼な気候は、決して常に優しいわけではありませんでした。戦後、作物が育たない火山灰の荒野に立ち、絶望の中で活路を見出した牛乳。それは、この厳しい大地と対話し、家族のように牛を育てた人々の、希望の味そのものです。日本有数の企業がこの地を選んで育て始めた、真つ赤なトマト。冷涼な気候と清らかな水が、開拓者たちの情熱と出会い、凝縮された甘みを生み出しています。そして、遠くロシアから来た人々との交流の中で生まれた、一個のピロシキ。厳しい開拓の冬を共に越え、心を温め合った交流の記憶が、今もその味に息づいています。その自然と対話し、時には開拓の苦勞を乗り越え、試行錯誤を重ねてきた職人たち（生産者）の技術と哲学こそが、那須の食材を特別なものにしていきます。彼らの農場や工房、そして直売所は、その想いの結晶に直接触れられる場所です。

感じ取ってほしいメッセージ

宝庫を形成する一人ひとりの生産者の顔と想い。自然と人間の協働によって生まれる豊かさ。食べることを通じた生産者との心の交流。一つひとつの食材に込められた物語の深さと温かさ。「宝」と呼ばれるに値する価値の重み。

探求を促す「問い」の解説

物語の最後の「あなたは、どんな物語を味わうことになるのでしょうか。」という問いは、あなたを消費者から物語の体験者へと誘うためのものです。食べるという行為は、生産者が紡いできた物語の、最後のページをめくる行為でもあります。その一皿に込められた時間と想いを感じることで、あなたの旅は、より深く、滋味豊かなものになるはずです。

自身が物語となる問い

この土地の職人たちは、自然と対話し、日々、想いの結晶を生み出しています。もしあなたが、目の前の一皿に込められた想いを受け取ったなら。あなたは、その生産者に、どんな「ありがとう」を伝えたいのでしょうか。そして、あなた自身は、この食の体験からどんな物語を持ち帰りますか。



③ 人の物語

テーマを感じられる 資源・体験

食材を口にする際に生産者の顔や想いを思い浮かべる体験、生産現場を訪れて生産者と直接対話する体験、「食材の宝庫」という言葉の背後にある無数の物語を発見する体験、食べることが単なる消費ではなく生産者との関係性を築く行為であると感じる体験。

道の駅
那須高原
友愛の森

地元の生産者が持ち寄る想いの結晶である野菜や加工品に触れ、その多様性を知る。



チーズ 工房

職人たち（生産者）のこだわりと、那須の風土が生み出すチーズの物語を味わう。



地元の 味噌

造り手の思いが息づく小さな味噌蔵の手作り味噌。



地元の食材を使う レストラン・カフェ

シェフという職人が、生産者の想いを受け継ぎ、一皿の物語として表現する場を体験する。



農産物直売所 （道の駅 東山道伊王野など）

地元の人々の日常に並び、採れたての食材から生産者の顔を想像する。



ファーマーズ マーケット （那須地域のマルシェ）

職人たち（生産者）と直接対話し、食材に込められた想いを直接聞く。





3 人の物語

山頂から麓まで那須の自然が語りかける声に耳を傾け、それを言葉や形にして伝えようとする人々の情熱が、あなたの心に響く体験を生み出している。

心に届ける

体験のストーリー

森を歩いていると、一枚の葉の形に、あるいは沢の音の響きに、ふと心が動かされることがあります。それは美しい、あるいは、不思議だ、と感じる純粋な感動です。しかし、その感動の奥に、さらに深い物語が隠されているとしたらどうでしょう。

この地には、その自然が語りかける声に、生涯をかけて耳を傾けている人々があります。彼らは、山頂の荒々しい岩肌が刻んできた時間の記憶を読み、山麓のブナの森がどのようにして命を育んでいるかを知り、そのすべてを、訪れる誰かの心に届けたいと願っています。

ある人は、自然を案内するガイドとして、あなたが見過ぎてしまうかもしれない小さな命の輝きを指し示し、その意味を解きほぐします。彼らは皆、言葉や形は違えども、自然という偉大な存在の翻訳者なのです。

彼らがしていることは、単なる知識の伝達ではありません。それは、自らが深く愛するものの物語を、どうすればあなたの心に響かせることができるかという、情熱をかけた挑戦です。彼らの熱のこもった眼差しや言葉に触れるとき、風景はただの景色ではなく、あなたと深く結びついた体験に変わります。

その熱意を受け取ったあなたの心には、どんな新しい物語が生まれ、どんな言葉が響き始めるのでしょうか。

テーマの目的

那須でガイド、自然体験に携わる人々が、自然からのメッセージを受け取り、それを来訪者に伝えようとする情熱と努力を理解する。伝えるという行為の価値と、そこに込められた想いを感じる。

物語の奥にあるもの

ストーリーの解説

那須での感動的な自然体験が、実は自然とあなたという一対一の関係だけで完結しているのではなく、その間に立つ伝え手の情熱によって、より深く、響くものになっていることを描きたいと思いました。体験の価値は、人が人を想う情熱によってこそ生み出される、ということがこの物語の核心です。

資源の解説

那須の資源は、山や森、川だけではありません。その魅力を解き明かそうとする人こそが、最も貴重な資源です。一人ひとりが持つ自然への深い洞察と、それを伝えようとする想いそのものが、このテーマの資源です。

感じ取ってほしいメッセージ

自然の声を聴こうとする人々の感性。伝えることへの情熱と責任感。表現の多様性。伝え手と受け手の心の交流。

探求を促す「問い」の解説

物語の最後の「どんな言葉が響き始めるのでしょうか。」という問いは、あなたが受け手であると同時に、新しい伝え手になる可能性を秘めていることを示唆しています。ガイドの情熱があなたの心に火を灯したなら、あなたはもう物語の傍観者ではありません。あなた自身が、その感動を誰かに語り始める主役となるのです。

自身が物語となる問い

森の翻訳者たちは、あなたにそつと物語のバトンを渡しました。あなたがこの地で出会った、心から美しいと感じた瞬間は、どんな物語でしたか。そして、その物語を、あなたは次に、どんな言葉で、誰に伝えたくなるのでしょうか。



③ 人の物語

テーマを感じられる 資源・体験

ガイドの解説を通じて、自然の新たな側面を発見する。地域の人々がなぜこれを伝えたいのかという想いに触れる。自分自身も誰かに那須の魅力を伝えたいくなる。

那須 平成の森 (那須町)

森の案内人の情熱に触れながら、自然の声を聴く、森を歩く。



各種アウトドア ガイドツアー

ガイド一人ひとりの個性的な視点や伝えたいという想いそのものを体験する。



那須高原 ビジタセンター (那須町)

那須の自然の成り立ちや仕組みを、伝えるために工夫された展示や解説から知る。





③ 人の物語

那須という地は、自然との調和を
求める人々を惹きつけ続け、
彼らが創り出す心豊かな時間と
空間が、この土地の新しい物語を
紡いでいる。

惹きつけあう

人々のストーリー

那須の森を歩き、カフェのテラスでふと息をつく
とき。この場所に流れる時間の質感が、ほかのどこ
とも違うと感じるかもしれません。それは、ただ美
しい自然がそこにあるから、というだけではない、
不思議な力に満ちているからです。

この土地には、まるで磁力のように、ある特定の
人々を惹きつけてやまない何かがあるようです。そ
れは、自然と調和しながら生きたいと心から願う
人々を、時代を超えて呼び寄せる静かな力。

遠い昔の開拓者たちもそうであったように、今
も、インスピレーションを求めるアーティストや、土
に触れることを選んだ職人、自分らしい時間を大
切にするカフェの店主たちが、この地に集まってい
ます。彼らは、那須の風土に敬意を払いながら、自
らの夢や価値観を重ね合わせ、新しい文化の種を
蒔いています。歴史ある別荘地の静けさと、新しく
生まれた小さな店の活気が、まるで昔からそうで
あったかのように自然に溶け合っている風景。

それこそが、彼らが創り出す心豊かな時間と空
間であり、那須の物語が、過去の記憶としてだけ
はなく、今この瞬間も、豊かに紡がれ続けている確
かな証なのです。

この磁力に導かれて、今、ここにいるあなたは、この
風の中で何を感じ、この土地の物語にどんな新し
い音色を加えることになるのでしょうか。

テーマの目的

那須が持つ磁力(人々を惹きつけ
る力)と、そこに集まる人々が新し
い文化や価値を創造していること
を伝える。訪れる人々が、那須の進
化し続ける物語の一部になれるこ
とを実感する。

物語の奥にあるもの

ストーリーの解説

那須の魅力は、雄大な自然や歴史的な遺産といった完成され
たものだけにあるわけではありません。この物語で描きたかったの
は、那須が持つ磁力に引かれた人々が、今この瞬間も新しい魅力
を生み出し続けているという現在進行形の物語です。那須は、訪
れる人々を傍観者にせず、その物語の書き手の一人として迎え
入れてくれる場所であることを感じていただけたらと願ってい
ます。

資源の解説

このテーマの資源は、那須の人とその営みそのものです。例え
ば、この地で医師として人々と触れ合い、那須湯本の日常や風土
に根ざした暮らしの姿を、ユーモアと温かい眼差しで描き続け
た作家の「見川鯛山」。彼の作品は、まさに那須の心豊かな時間
を映し出しています。また、那須八幡に生まれ、この土地の自然
や動物、子どもたちを題材に、鳥山和紙や益子焼といった地域の
素材を用いて、那須独自の温かみある郷土民芸の世界を創り出
した作家の「五十嵐豊」。彼らのように、那須の風土を愛し、そ
れぞれの方法で表現した人々。そして、新しく移住して開かれた
個性的なカフェやベーカリー、自然に寄り添う作品を生み出す
アーティストの工房、多様な人々が集うマルシェ。それら一つひと
つが、那須の心豊かな時間と空間を創り出し、この土地の物語
を新しく紡いでいる、かけがえのない資源です。

感じ取ってほしいメッセージ

那須が持つ、人々を惹きつける独特の魅力。自然との調和を
求める人々の価値観と生き方。過去から続く物語と、今も新し
く紡がれている物語の共存。自分も那須の物語の一部になれると
いう可能性。

探求を促す「問い」の解説

物語の最後の「あなたは、この土地の物語にどんな新しい音色
を加えることになるのでしょうか。」という問いは、あなたもまた
この磁力に惹かれて那須を訪れた主役の一人である、ということ
をお伝えするためのものです。あなたがここで過ごす時間、感じ
る心地よさ、それらすべてが、那須の物語の新しい1ページとし
て確かに刻まれていく、ということを想像してほしいのです。

自身が物語となる問い

この土地に集う人々は、自然との調和の中に心豊かな時間
を見出してきました。では、あなたにとつての心豊かな時間と
は、どのようなものでしょうか。そして、あなたがこの那須で過
すひとときが、あなた自身のこれからの物語にとって、どのよう
な新しい音色をもたらしてくれるのでしょうか。



③ 人の物語

テーマを感じられる 資源・体験

新しく移住してきた人々の話を聞き、なぜ那須を選んだのかを知る。伝統的な文化と新しい文化が融合している場面に出会う。お店やマルシェで、多様な背景を持つ人々との交流を楽しむ。自然の中で過ごしなが
ら、那須が持つ磁力を体感する。自分が那須で過ごした時間が、那須の物語の一部になることを実感する。

カフェ・ ギャラリー

移住者やアーティストが創り出す
心豊かな空間と時間を感じる。



那須の マルシェ

多様な背景を持つ出店
者と交流し、新しい文
化が生まれる瞬間に立
ち会う。



アーティストの工房・ アトリエ

那須の自然に惹かれた人々が、イン
スピレーションを形にする現場に
触れる。



黒磯駅 周辺

古い建物を活かし、新しい感性で
心豊かな時間を提案する空間を体
験する。



コミュニテイ イベント

地元の人々と移住者が協働し、新しい
物語を紡いでいる現場を体感する。



個性的な 飲食店

那須を選んだ人々が表現する豊か
さの形を、食を通して味わう。



那須の 郷土民芸品

五十嵐豊氏らが創り出した、那須
の自然や子どもたちをモチーフに
した作品の温かさに触れる。





3 人の物語

那須の暮らしは、自然の厳しさを
知る人々が互いに手を取り合い、
「ここで生きる」という覚悟と喜びを
分かち合いながら育ててきた、
温かなコミュニティである。

居心地の良さの ストーリー

那須でふと出会う、人の温かさ。それは、この
土地の居心地の良さの、本当の源なのかもしれ
ません。洗練された避暑地としての静かな佇ま
いと、時折すれ違う人々の穏やかな笑顔。それ
らが、まるで昔からここに根を張っていたかの
ように、ごく自然に存在しています。

しかし、この居心地の良さは、ただ自然が与
えてくれたものではありませんでした。火山と
いう荒ぶる大地、そしてすべてを凍てつかせる
冬の厳しさ。この土地で生きることとは、その厳し
さを正面から受け止めるという覚悟を必要と
しました。

だからこそ、人々は手を携えました。一人では
越えられない困難を前に、互いの手のひらを合
わせ、その温もりを分かち合ったのです。それ
は、古い別荘地を拓いた先人たちも、戦後に荒
野を耕した開拓者たちも、そして今、この地を
選んだ新しい住民たちも同じです。

彼らがここで生きると決めた覚悟と、それを
支え合った絆。それこそが、何世代にもわたって
この土地に受け継がれ、育て上げてきた、目には
見えない温かなコミュニティという名の文化なの
です。

あなたが今感じているこの温もりは、そうし
た無数の人々が分かち合ってきた喜びと、厳しい
冬を越えたからこそ知る、手のひらの温もりそ
のもの。あなたは、この温かな輪の中で、誰と手
を取り合いたくなるでしょうか。

テーマの目的

那須の現在の居心地の良さが、避暑地文化と、過酷な自然環境の中で知恵を絞ってきた先人たちの営みによって築かれてきたことを理解する。那須で暮らすことはその歴史と文化の主体者となることを実感する。

物語の奥にあるもの

ストーリーの解説

この物語で描きたかったのは、那須の居心地の良さという魅力が、実は自然の厳しさと表裏一体であったということです。火山や厳しい冬という環境が、人々に共に生きるための知恵と覚悟を与え、それが結果として温かなコミュニティという、何物にも代えがたい文化的な価値を生み出した。その歴史の連続性をお伝えしたいと考えました。

資源の解説

「御用邸」や「旧青木家那須別邸」に代表される上質な別荘地の風景は、那須の洗練された避暑地文化の象徴です。しかし、それと同時に、那須には厳しい冬というもう一つの顔があります。このテーマにおける本当の資源とは、その両極端な環境の中で育まれてきた、目に見えない人々の絆。人力で暮らしを築く人々の協働そのものです。さらに、「獅子文六」のような別荘を構えた文化人たちが、単に滞在するだけでなく、地元の人々と積極的に交流し、互いの文化を尊重し合った歴史も、那須の豊かさを形作っています。厳しい自然と向き合う人々の協働と、異なる背景を持つ来訪者と居住者が織りなす交流。この二つが合わさった温かなコミュニティこそが、那須の居心地の良さの源泉と言えるでしょう。

感じ取ってほしいメッセージ

那須の居心地の良さは自然が与えてくれたものではなく、多くの人々が時間をかけて築き上げてきた文化的な価値であること。那須の暮らしの温かさは、厳しい自然環境の中で共に生きることを選んだ人々の絆から生まれていること。那須で暮らすということとはその価値の新たな担い手となるという責任と誇り。過去から現在、未来へと続く人々の営みの連続性の中に自分も位置づけられるという感覚。

探求を促す「問い」の解説

物語の最後の「あなたは、この温かな輪の中で、誰と手を取り合いたくなるでしょうか。」という問いは、あなたを那須の暮らしという物語の傍観者から、温かなコミュニティを未来へと受け継ぐ主体者へと誘うためのものです。この土地の価値は、人が人との関わりの中で築いてきたもの。あなたが誰かと手を携えること、それこそがこの物語の新しい一歩となります。

自身が物語となる問い

先人たちは、厳しい自然の中で手を取り合い、この温かなコミュニティを築き上げてきました。それは、過去から現在、そして未来へと続く、終わりのない営みです。もしあなたが、この暮らしの担い手の一人となるときたら。あなたは、この土地で育まれてきた手のひらの温もりを、どのように次の世代へと手渡していくでしょうか。



③ 人の物語

テーマを感じられる 資源・体験

御用邸周辺や別荘地を歩きながら、上質な避暑地文化を感じ取る。地域の祭りや行事に参加し、那須の人々の絆を体験する。冬の厳しさを経験した人々の話を聞く。地域の助け合いの仕組み（共同作業、情報交換、交流会など）に参加する。地元の人々との対話を通じて、那須で暮らすことの意味を考える。

地域の 祭りや行事

共同体を維持するために人々が手を取り合い、喜びを分かち合ってきた絆の温かさを体感する。



農作業や地域 の共同作業 (那須地域)

厳しい自然環境の中で互いに助け合ってきた結（ゆい）の精神に触れ、共に汗を流す喜びを分かち合う。



地元の人々 との対話

移住者や長く暮らす人から、那須で暮らすことの喜びと厳しさの生の声を聞き、その物語に触れる。



冬の 那須高原

観光シーズンとは異なる静けさと厳しさの中で、ここで生きることの覚悟と、それを支える人々の暮らしの知恵に思いを馳せる。



地域の コミュニティ スペースや

地元の人々と移住者が自然に集い、情報交換や交流を行う温かなコミュニティの今を体験する。

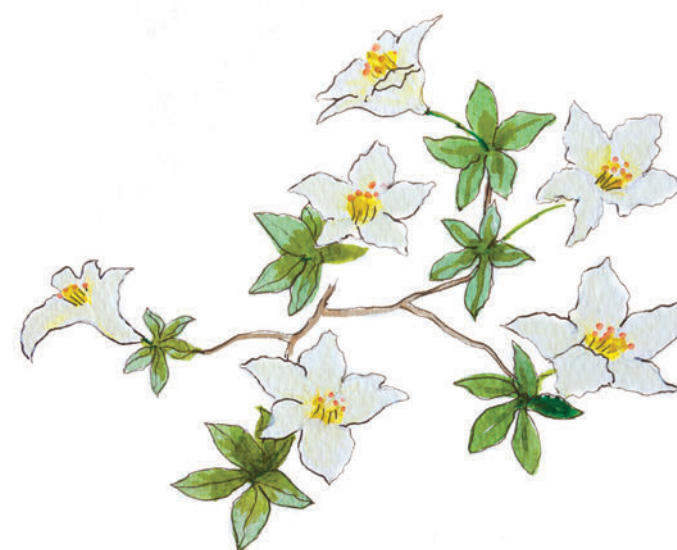


皇室が愛し地域からも愛された
那須のポテンシャル

④ 御用邸の物語



なす爺は自然大好き。
時間を見つけては虫眼鏡片手に動植物の観察に出かけるらしい。新種を発見して自分の名前を付けるのが目標で、今日も山歩き。那須の動植物を語らせたら右に出るものはいない、らしい。





4 御用邸の物語

昭和天皇が生涯愛し続けた那須の自然は、
地域の人々が何世代にもわたって守り
育ててきた宝であり、その敬意と努力が
御用邸という象徴の形で今も私たちに
語りかけている。

愛された那須の ストーリー

那須の森は、ただ静かなだけではありません。その木立を抜ける風、足元に咲く小さな花には、誰かの深い愛情がそっと触れているような、特別な温かさが宿っています。

かつて、この那須の自然を生涯愛し続けたお方がおられました。昭和天皇です。公務の合間にこの地を訪れ、森を散策し、植物や生き物たちに静かに心を寄せられました。そのまなざしは、生物学者としてのものであり、同時に、この地の自然を深く敬う一人の人間としてのものでした。

しかし、その昭和天皇が愛した森は、ただそこにあったわけではありません。それは、この土地の人々が、何世代も前から宝として、時には厳しい自然から守り、時には暮らしの知恵として共生し、大切に育ててきたものでした。人々は知っていたのです。この森こそが、那須の命そのものであると。

その地域の人々の静かな誇りと、昭和天皇の深い愛情。二つの想いが響き合う場所として、「御用邸」はここに在ります。それは、豪華な建物としてではなく、自然への敬意と、人と人との信頼が交わる象徴として、今も静かにたたずんでいます。

あなたが今、この森の空気を吸い込むとき。その清らかさの奥に、この宝を守り抜いた人々の息吹と、ひとつの優しいまなざしを感じることができるでしょうか。

テーマの目的

御用邸が単なる建物ではなく、地域の人々の努力と皇室の敬意が交わる那須の象徴であることを理解する。

物語の奥にあるもの

ストーリーの解説

この物語でお伝えしたかったのは、「御用邸」という存在が、単なる天皇御一家のご静養の地という側面だけではなく、那須の自然を核とした二つの想いが出会う場所であったということです。一つは、昭和天皇の那須の自然への深い愛情。もう一つは、その自然を何世代にもわたり守り育ててきた地域の人々の誇り。この二つの敬意が響き合ったからこそ、那須の自然は今も輝きを失っていない。御用邸は、その関係性の美しさを物語の象徴として描かれています。

資源の解説

この物語を象徴する資源は、那須御用邸そのものと、その設立の経緯に深く刻まれています。那須御用邸の歴史は、1923年(大正12年)に始まります。当時皇太子であった昭和天皇が初めて那須の地を訪れ、那須連山が織りなす山々と高原の壮麗な景観に深く感銘を受けられたことが、すべてのきっかけでした。そのわずか3年後、昭和天皇がご即位された年でもある大正15年(1926年)7月、夏の避暑地として那須御用邸の本邸が完成しました。これは現存する御用邸の中で最も古いものです。

生物学者でもあられた昭和天皇は、那須御用邸を生物研究の拠点として毎夏のご滞在中、森を歩き植物の調査を続けられました。その情熱は、栃木県の絶滅危惧種であるナスヒオウギアヤメの発見と命名へとつながり、ご自身の著書「那須の植物誌」の序文には、「毎年、夏を那須で過ごす。(中略)それをしあわせとして、付近の自然を楽しむことにしている。」と、その深い愛情を記されています。

この天皇御一家と那須の自然との結びつきは、次世代にも受け継がれています。愛子内親王殿下のお印であるシロヤシオ(ゴヨウツツジ)も、那須の山々を彩る花の一つです。そして、平成の時代に入り、当時の天皇陛下(上皇陛下)のご意向で、御用邸の敷地の約半分(約560ヘクタール)が国民が自然にふれあえる場として環境省に移管され、「那須平成の森」として開園しました。「那須御用邸の敷地の一部であった森として、現在は一般に開かれている「那須平成の森」は、このテーマを最も色濃く体感できる場所です。そこは、昭和天皇が愛した自然が残る森であると同時に、地域の人々が大切に守ってきた森でもあります。御用邸という存在が、この貴重な自然を未来へ受け継ぐための、大きなきっかけとなりました。森を歩くことは、二つの想いが紡いできた歴史の上を歩くことでもあります。

感じ取ってほしいメッセージ

昭和天皇の那須への深い愛情。地域の人々が代々守ってきた自然への誇り。皇室と地域の人々の間に生まれた信頼と敬意の関係性。

探求を促す「問い」の解説

物語の最後の「その清らかさの奥に、…感じる」ことができるでしょうか。という問いは、あなたに、目に見える風景の奥にある物語を感じていただくためのものです。那須の森の美しさは、人々の意志と愛情の結晶です。その事実に気づくとき、あなたは単なる訪問者から、その価値を受け継ぐ物語の主役の一人となるのです。

自身が物語となる問い

昭和天皇が愛し、人々が守ってきたこの宝である森。もしあなたが、この森から一本の木を未来に残すとしたら、そこにどんな想いを込めますか。そして、あなた自身は、この森の物語から何を受け取り、明日へとつないでいくでしょうか。



④ 御用邸の物語

テーマを感じられる 資源・体験

御用邸周辺の自然を観察しながら、昭和天皇が愛した理由を想像する。地域の人々が守ってきた自然の美しさに気づく。皇室と地域の人々の関係性に思いを馳せる。自分も那須の自然を大切にしようと思う。

那須 平成の森 (那須町)

かつて御用邸の一部であった森を歩き、昭和天皇が愛した豊かな自然と、守られてきた命の息吹を体感する。



那須高原 ビジター センター (那須町)

御用邸と那須の自然との関わり、地域の歴史について学び、物語の背景を知る。



「シロヤシオ

5月から6月上旬が見頃。愛子内親王のお印である、「シロヤシオ(ゴヨウツツジ)」。



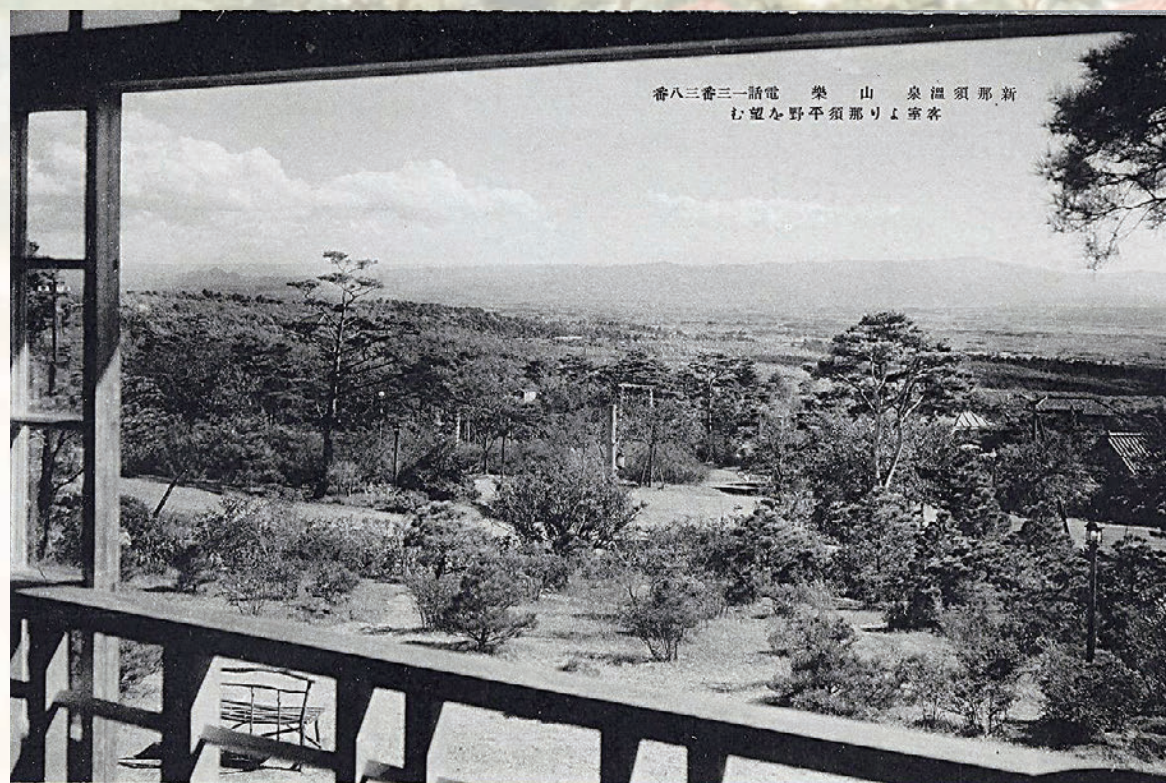
「ヒオウギアヤメ

那須高原の一部に自生し、昭和天皇が研究され、後に新しい植物として、「ナスヒオウギアヤメ」と名付けた。



「那須温泉 山楽

昭和天皇が大変気に入られた山楽から望む景色。



なぜ那須でインタープリテーション 全体計画を作ったのか

では、なぜこの那須という地域において、インタープリテーション全体計画を作る必要があったのでしょうか。那須には、雄大な自然、歴史ある温泉、豊かな食など、数え切れないほどの魅力的な資源が存在しています。これらは例えるなら、夜空に散りばめられた無数の星です。一つひとつの星は美しく輝いていますが、これまではそれらが個別の点として発信されることが多く、底流にある「那須という地域らしさ」が訪れる方々に十分に届ききつていないという課題がありました。

そこで私たちが目指したのが、那須の魅力の最大化を行うことです。個々の星（資源）の魅力を単独で伝えるのではなく、どの星とどの星をつなげば意味のある形になるのかを考え抜き、那須を表す大きな星座を描き出すこと。オリオン座が英雄の物語を語るように、点在する資源をつなぎ合わせて那須とはこういう場所だというひとつの壮大な物語（星座）を浮かび上がらせるための道標として、この全体計画が必要だと考えました。

那須全体がひとつの大きな天体として、そしてそこにある星座が物語として語りかけ

てくるようになることで、那須の魅力が最大化されると、訪れた人の体験は大きく変わります。

魅力の最大化とは那須に訪れた人々の心に響く触発が生まれ、行動や価値観が自然と変わっていくような地域にしていこうということです。

単に観光地を訪れたという思い出にとどまらず、那須の背景にある深い想いや営みに触れることで、来訪者の心の中に強い愛着が芽生え、訪れたあとの行動にまで変化が生まれる地域とは、訪れる人の心に深く関わり、その人の価値観に影響を与える場所になるということです。そうして心を動かされた人々は、またこの場所に帰ってきたいと願う特別なファンになってくれます。那須を、誰かにとつてのかけがえのない特別な地域にしていこう。それが、この計画を作った一番の理由です。

インタープリテーション全体計画とは今みなさんが手にしているこの「ストーリー集」のことなのです。

インタープリテーションとは

私たちの周りには、美しい自然や歴史ある建物、大切に受け継がれてきた文化など、たくさん魅力的な資源があります。それらを誰かに紹介するとき、私たちはつい、事実を正確に、そして分かりやすく説明しようとしてしまいます。しかし、インタープリテーションとは、ただ分かりやすく物事を伝えるということではありません。

たとえば、山に咲く一輪の花を前にしたとき、その花の名前や珍しい生態を教えることが最終的な目的ではなく、重要なのは、その花がなぜこの場所に咲いているのか、周りの自然環境や私たちの暮らしとどのようなつながりを持っているのかという、資源を見るだけではわからない背景や深い意味を届けることです。

そして最もお伝えしたいのは、インタープリテーションにおいて伝えることは決してゴールではないということです。大切なのは、伝えたその先にあるもの。その場所にしかない特別な意味やつながりを、訪れた人自身の経験や感覚と結びつけながら分かち合う

ことで、そういうことだったのかと地域の再解釈が生まれます。単なるその場限りの関心で終わるのではなく、地域との間に新たな関係性が結ばれ、心の中にもっと知りたい自分も何かやってみようといった深い感情の揺れ動きが起ること。そしてそこから新たな物語が始まること。私たちはこれを触発と呼んでいます。

この心の中の小さな触発こそが、地域を大切にしようという意識を変えたり、その地域をもっと深く歩いてみようという足を延ばしたりするようになり、明日からの行動が変わるきっかけとなります。情報を受け取って終わるだけの見学者から、自ら感じ、考え、行動する人へと変わっていくこと。人の心を深く動かし、その後の行動や地域へのあらたな関わりを生むような、かけがえのない出会いを生み出すこと。それが、この那須におけるインタープリテーションで目指す本当のゴールです。

なぜ「ストーリー集」と呼ぶのか？

このインタープリテーション全体計画には、「ストーリー集」という言葉が添えられています。なぜ、あえてそのような呼び方をするのでしょうか。

まず心に留めておいていただきたいのは、ここに記されたストーリーをそのまま読み上げたり、来訪者にストーリーを伝えることが目的ではないということです。ストーリーはあくまで、人の心を動かすための手段にすぎません。インタープリテーションにおいて情報を伝えることと自身がゴールではないのと同様に、ストーリーを語って聞かせることも、私たちが目指す最終地点ではないのです。

私たちがストーリーという形にこだわったのは、この計画が目指している那須の魅力の最大化を実現するための手法そのものが、物語化にあると考えたからです。

素晴らしい事実や歴史であっても、単なる情報として提示されただけでは、人

の心はなかなか動きません。しかし、そこにある人々の想いや、育まれた背景を織り交ぜて物語として仕立てることで、初めて受け手の感情に深く届くようになります。物語には、聞く人をその世界に引き込み、心に忘れられない感動を残す力があります。

つまり「ストーリー集」という名前は、これが単なる解説本や観光パンフレットではなく、那須の魅力を最大化し、訪れる人の心に触発を生み出し、来訪者自身が物語の主役となる新たな物語化のツールであることを意味しています。

この物語の数々は、完成品としてただ読んで楽しむためのものではありません。地域の皆さんが、日々の営みの中で、ご自身の想いや言葉を乗せて語り継ぐことで、初めて生きたストーリーとなります。物語化という手法を通じて、那須を訪れる人と地域との間に深く温かい絆を結んでいく。

その願いを込めて、私たちはこの那須インタープリテーション全体計画に「那須を大好きになるストーリー集」というサブタイトルを付けました。



那須インタープリテーション全体計画



vol.1 参加人数76名 インタープリテーションの理解と 地域資源・体験の発掘

第1回ワークショップでは、地域の皆さんにインタープリテーション(IP)の概念を理解してもらい、那須の持つ豊かな資源や体験と一緒に発掘することを目的としました。特に、地域主体での取り組みの重要性とその想いを共有することに重点を置くワークショップとしました。

vol.3 参加人数68名 テーマとは何かの再共有と テーマ文の精査

第3回ワークショップでは、地域の皆さんと一緒にロードマップの共有と、テーマ文の精査を中心に話し合いを行いました。どんなことをやったのか、どんな成果があったのかを、お伝えしました。

vol.2 参加人数66名 資源の深掘りと物語として 伝えるテーマ文

第2回ワークショップでは、那須の魅力をもっと深掘りし、地域全体でその魅力を発信していくためのアイデアをみんなで考えました。内容は不足する資源・体験の発掘とテーマ文の試作。なんだか難しそうに聞こえるかもしれませんが、実際はとても楽しく、充実した時間を過ごすことができました。

vol.4 参加人数43名 今までの総括と今後の活動を共有

那須IPチームがほぼ組み立てを行った第4回ワークショップでは、今まで行ってきたワークショップの総括となるワークショップとなりました。これまでの活動を振り返りながら、未来に向けた新たな一歩をみんなで考える場となりました。

ワークショップのアーカイブ

発 行 登録観光地づくり法人（登録 DMO） 一般社団法人 那須町観光協会
地域事務局 栃木アウトドア事業振興会 BER GTOAD

制 作 那須 IP チーム
那須地域のみなさま

クリエイティブ

表紙イラスト 米倉万美

デザイン id e a p o k e t

編 集 砂川印刷株式会社

執 筆 栃木アウトドア事業振興会 BER GTOAD

那須インタープリテーション全体計画 Ver.02
(那須を大好きになるストーリー集)

2026年2月版

主 管 登録観光地づくり法人（登録DMO） 一般社団法人 那須町観光協会
事務局 栃木アウトドア事業振興会BERGTOAD
制 作 那須IPチーム



公式サイト
<https://nasu-ip.bergtoad.net/>

※本書のPDFデータは上記サイトより無料でダウンロードいただけます。

■ 本書の取り扱い

【本書の活用について】

本書は、那須の豊かな魅力を伝え、次世代へつなぐための「インタプリテーション全体計画」です。
地域活動や学習、ガイドの現場などで広くご利用いただくため、以下のルールの範囲内であれば、Web サイトからのダウンロード、および印刷しての使用・配布を歓迎いたします。

【禁止事項】

内容の改変：イラスト・文章の書き換え、図表の修正など、内容を編集して二次配布すること。
販売・営利目的の利用：データや印刷した冊子を有償で販売すること。

【著作権について】

本書の著作権はイラスト、デザイン、テキスト等の各素材のそれぞれの制作者および一般社団法人那須町観光協会に帰属します。引用される際は、必ず「出典：那須町インターネット・プラットフォーム全体計画」と明記してください。



あなたのストーリーとして